高等小學讀本 卷三

文部省

T1A4
1J6
To46

43176
教科書文庫
4
810
32-1936
25000
29782

教科書文庫
4
810
32-1936
2500029782

廣島大學東雲分校圖書之印

高等小學讀本

文部省

卷三

受入番号
29782
分類
357.98
M

広島大学図書
2500029782

目錄

第一課　春晴千里……一
第二課　五百羅漢の畫幅……七
第三課　文字……十一
第四課　鳥の聲……十七
第五課　感情……二十一
第六課　ペスタロッチ……二十五
第七課　川柳……三十三
第八課　噴油……三十四
第九課　旅行先より先輩へ……四十二
第十課　ナポレオン……四十四
第十一課　空の景色……五十八
第十二課　望遠鏡と顯微鏡……六十二
第十三課　バクテリア……六十六
第十四課　阿閦掃部……七十
第十五課　租稅……七十四
第十六課　水と風景……七十九
第十七課　天然記念物……八十一
第十八課　由利八郎の意氣……八十八
第十九課　夏の曉……九十三
第二十課　中吉の誠實……九十六
第二十一課　夕立雲……百一
第二十二課　會社……百七
第二十三課　逗子だより……百十一
第二十四課　地震……百十七
第二十五課　日本の風土……百二十四
第二十六課　ビクトリヤ女帝……百二十八
第二十七課　罐詰……百三十二
第二十八課　落日……百三十七
第二十九課　待賢門の戰……百三十八
第三十課　興國の民……百四十三

高等小學讀本　卷三

第一課　春晴千里

一

春晴千里、山又山、水又水。近き水は澄みて山の綠を浮かべ、遠き山は霞みて水に藍を流す。東京を發せし我が汽車は、此の間に一線を引きて、今や東海道を下りつゝあり。海に面して窓に倚る客、筆と紙とを手にして寫し出せるは、歌か、詩かそも〳〵繪か。

七砲臺（品川舊砲臺）邊波穩やかにして、高く低く群飛ぶ鷗、落花の風にひるがへるに似たり。帆を半ば張りて出で行く

ヨヨアヌル
サヲル
キリウ
オクル
リヨキヤウ
ナグサメ
イソ
タヅケテ

舟あり、櫓を操りて横ぎる舟あり。房總二州の山は霞に消えて探れども見えず。

松青き處、色どり添ふるに桃の紅なるを以てす。自然は是等の美を贈りて旅客を慰め、詩人は其の美を詠じて春に謝せんとす。藤澤の野、山北の谷、人々唯美しと叫ぶ。三保の松原けむりわたりて、春は繪の如し。磯に碎けて折れかへる波、波路の末に浮立つ雲、何ものか造

メラヒツ
モレン
スイサイ
イキ
コク
ニホ
ネムリテ

化の妙筆に漏れん。近き舟は行けども、遠き帆影は動かんともせず。遠くかすかに横たはれるは伊豆なるべし。富士は水彩もてゑがかれたるが如く、窓の右に立ち、又左に現る。

平原十里、麥は綠に、菜の花は黃なり。熱田の社を左に見て春風に吹かれ行けば、名古屋の城はまがはぬ影を見せ初めたり。

彦根去り、草津來り、瀨田川を渡れば、京都も早近くなりぬ。朝日將軍の遺蹟は何れの處ぞ。霞に包まるゝ遠近の山影、或は淡く或は濃く、鳩の浦風波に眠りて、粟津の松原獨り昔に似たり。

トラ
ムンゲイ
シタシイ
ナツカシイ
イモヨト
ユメ
ラツツ
シバテ
ツミ
ヤナギ
ラカン
サリ公ル
アタモ

東寺の塔は我を迎へて立ち、賀茂川の水は我を迎へて歌ふ。慕はしき母に會ひ、懷かしき妹と語るに似たるは、何時も京都に着きし時の心地なり。

二

山紫に水明らかなる處、唯夢の如く現の如く、三條を渡り四條を渡ること日に幾度ぞ。つゝじを柴に折添へて戴き連れたる大原女も、何時しか我が友となれり。如意嶽より吹來る春風は、輕く我が袖を拂ひ、又堤の柳を吹く。

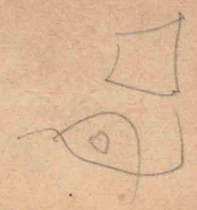
打續く晴天に、都の人々は春にあこがれて、西へ東へと群行く。さし續けたる日傘は、橋の欄干と共に水に影を

ロウバ
モチ
ロウモン
ニル(芭)
コウラン
ドキヨウ
ウグイス
フム
テンテツ
ホエル

落せり。花に誘はれて佛に詣で、佛に導かれて花を見る客、今日も清水觀音の堂前を滿たしぬ。舞臺の上より見下す人、舞臺の下に咲誇る花、恰も一幅の四條畫なるに、老婆は此の間に立ちて、「わらび餅召せ。」など呼ぶ。

西山の花見る人は、多く先づ御室を指す。松青く樓門赤く、茶を煮る煙絶えぐ〳〵にあがりて、花極めて白し。塔は霞をもれて松風の外にそびえ、鐘樓は昔を說きて香雲の中に包まる。讀經の聲遠く響きて、鶯の歌高きこずゑに在り。

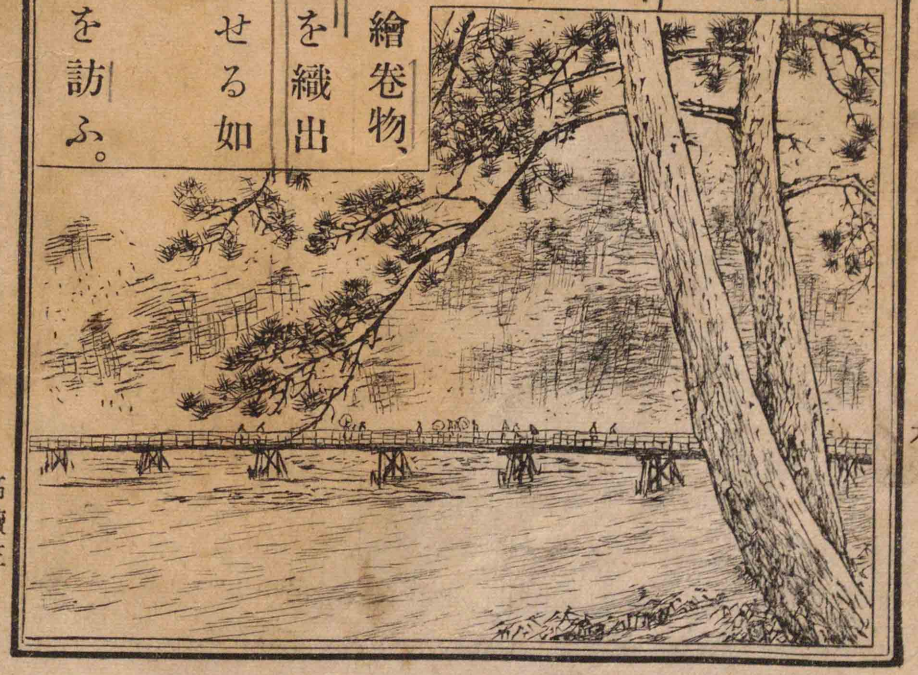
重る岩根を踏みしめて生ひ立つ松、其の間を點綴して咲誇る花、嵐山の春こそ今たけなはなれ。小舟に乘りて



キヲ
ニ
イカダ
高セン
ウツサ
コウ

漕行く人あり、岸の此方にて眺むる人あり。一筋の渡月橋は花の如き人を載せて虹の如く、散る花は風に漂ひて主なき筏に落つ。坂を登りて大悲閣に到れば、眼下に廣げらるゝ一卷の繪卷物、柳櫻をこきまぜて、恰も錦を織出せる如く、又友禪を染めなせる如し。

途に太秦を過ぎて、廣隆寺を訪ふ。

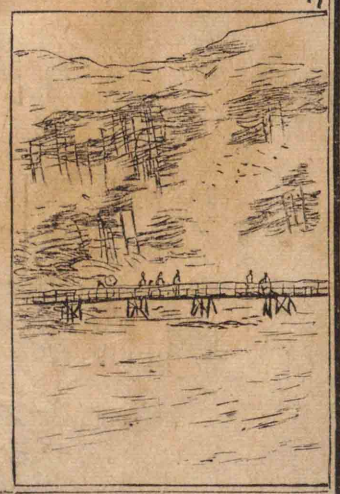


キヨウ
ミヨウロウ
エイザン
アト
アイイロ
セキメウ
ニヨリミル

二、
ヒカン
クラフク

夕陽靜かに鐘樓の瓦を染めて、春ものさびし。

暮色は東山をこめ、叡山を廻り、漸う賀茂川におそひ來れり。清水の塔も半ば隱れぬ。大文字の跡も姿を隱しぬ。紅に紫に藍に墨に見る〳〵彩られ行く山影、薄く濃く青く黑く消され行く人影、詩中のものならぬはなし。天地唯平和、四望唯寂寞、顧みれば西山も無く北山も有らず。（天和田建樹「雪月花」ニ據ル）



第二課　五百羅漢の畫幅

深川の本誓寺に五百羅漢の畫幅あり。畫は歴史畫家と

して有名なる菊池容齋が、苦心慘澹の筆に成りし大作にて、春秋の彼岸には、之を懸列ねて供養し、普く世人の參拜を許す。容齋が此の畫をかきしにつきては、哀なる物語あり。

抑今日廣く世に行はるゝ「前賢故實」は、容齋が畢生の心血をしぼりてゑがきなし、以て風教を補はんとしたるもの、辱くも明治天皇が日本畫士の號を賜ひしもこれがためなるべく、また和氣の清麿に神號を追贈あらせられしも、或は此の書が其の動機となりしなるべしとも傳ふ。されど初は此の十年苦心の作も、發行の書肆なく、上木の資財なく久しく筐底に籠めて、徒に紙魚のすみ

かとなるを待つばかりなりしかば、此の事餘りに情なく、折節は年來の親友なりし福田行誠に向ひて、堪難き遺憾の情を漏らしたりき。

其の頃、江戸牛込に加藤金兵衛といふ商人あり。手の中の珠と慈みし一人の娘年頃になりしかば、或方に嫁入らせしに、幾程もなくして身まかりぬ。婚禮の折持參の衣服調度、今は此方に置きてもせんなし、唯歎の種ぞとて、婿の方より里方に返す。里方にては受取らず、「一旦遣はしし娘の道具は卽ち其方の物、それを返さるゝは死したる者を離緣せらるゝやうにて、草葉の陰にも如何ばかり悲しからん。これは其方へ。」「いや、其方へ。」と押問答

の果、金兵衛は腕こまぬきて、「さらば我に思案あり。今深川におはす行誠上人は、淨土宗の大德、古今の名僧と聞くに、此の聖に託しまゐらせば衆生濟度の便ともし給ひて、なき娘が往生の縁ともなりぬべし。」といふに、卽ち相談は決し、彼の調度を賣りて一千兩の金を行誠に捧ぐ。さてこそ行誠は容齋を招きて、「喜ばれよ、御身の志は成りぬ。印刷の料は調ひたり。」とあるに、容齋は涙ぐむまで有難く、脫稿の後凡そ二十年にして、こゝに前賢故實の出版に取りかゝりしなりけり。斯くて年來の宿望は漸くこゝに遂げられたりければ、「如何にしてか此の大恩に報ゆべき。」と尋ぬるに、行誠は、「善いかな。さらば五百羅漢の畫をゑがきて供養し給へ。亡者の爲、施主の爲、如何ばかりなる功德ならん。」といふ。「それこそ我にはふさはしき業なれ。如何にもして加藤氏の名を萬世に傳ふるに足るものを。」と、沐浴齋戒してかき上げたるが、此の本誓寺の什物なりとかや。（藤岡作太郎「國文學史講話」ニ據ル）

第三課　文字

我等が、前代の事を知り、現時の世態を悟り、又廣く思想を社會に通じ、更に之を後人に傳へることの出來るのは、一に文字の賜物である。文明が時代を追うて次第に進歩するのは、其の大半は之を文字の功に歸しなければならない。

文字とは、思想を書記する符號であつて、然も多數の人の間に認められ、共通に用ひられるものである。太古、人は繩を結んで約束のしるしとしたことがある。今でも野蠻人の中には、樹枝を切つて種々の長さとし、通信・備忘の用に供するものがある。しかし是等はまだ文字と稱することは出來ない。文字として認むべきもので最も早く發明せられたのは、楔形文字及び漢字・エジプト文字である。楔形文字はアジヤの西部に行はれたもので、今は僅かに古い碑などに殘つてゐるに過ぎないが、漢字

やエジプト文字は其の後大いに發達變化して、現今世界の主なる國に行はれる文字となつた。

漢字には、日・月・山・水・魚・鳥・木のやうに、物の形に象つて作つたものもあり、木の上に一畫を加へて末、下に一畫を加へて本の意味を表したやうなものもある。木を二つ合はせて林、三つ合はせて森とするが如き、又日と月を合はせて明とするが如きは、數字を合はせて一

つの意味の文字を成すのである。各に宇冠又は木偏を添へて客・格とし、官に竹冠又は食偏を添へて管・館とする如きは、各特殊の意義を示すけれども、其の音は元の各・官によつて示されてゐる。漢字の構造は種々である。」我が國は古く支那の漢字を輸入し、之を用ひて物事を記してゐたが、後、假名文字を製作して、漢字とあはせ用ふるやうになつた。片假名は漢字の一部分を割いて作つたものであり、平假名は漢字の草體から發達したものである。

漢字はもと物の形に象つて作つたものであるが、其の後時代と共にいろ〳〵に發達變化して、今では其の由

來のわからないものが多く、字數も五萬を超えてゐる。エジプト文字も漢字と同じく、物に象つて作つたものであるが、其の後著しい發達を遂げなかつたため、終に繪畫の域を脱するに至らなかつた。しかし其の影響は甚だ大なるものがあつて、今日ヨーロッパ及びアメリカ諸國で用ひるローマ字も、此のエジプト文字から變化したものである。

楔形文字・漢字・エジプト文字の如きは、物の形に象つた文字であるから、象形文字といひ、又一字がそれ〴〵意義を有するから、意字ともいふ。假名文字及びローマ字の如きは、もと象形文字から發達したものではあるが、

A	a	𝒜	𝒶	N	n	𝒩	𝓃
B	b	ℬ	𝒷	O	o	𝒪	𝓄
C	c	𝒞	𝒸	P	p	𝒫	𝓅
D	d	𝒟	𝒹	Q	q	𝒬	𝓆
E	e	ℰ	ℯ	R	r	ℛ	𝓇
F	f	ℱ	𝒻	S	s	𝒮	𝓈
G	g	𝒢	ℊ	T	t	𝒯	𝓉
H	h	ℋ	𝒽	U	u	𝒰	𝓊
I	i	ℐ	𝒾	V	v	𝒱	𝓋
J	j	𝒥	𝒿	W	w	𝒲	𝓌
K	k	𝒦	𝓀	X	x	𝒳	𝓍
L	l	ℒ	𝓁	Y	y	𝒴	𝓎
M	m	ℳ	𝓂	Z	z	𝒵	𝓏

音のみを表す文字であるから、音標文字又は音字といふ。音字はそれ自身には意味は無いが、それによつて言語を書表すことが出來る。

第四課　鳥の聲

寢床を出ると、琵琶湖の見える部屋に行つてみる。朝日が部屋一ぱいにはいつてゐる。

湖水と思はるゝ邊は、雲ばかりで何も見えぬ。富士の頂上から雲海を見下したのと似た景色だ。部屋の下は東谷で、我が目よりやゝ高くやゝ低く、數知れぬ杉のこずゑがほこのやうに突立つてゐる。左手には、北谷の向ふに當る峯がのこぎりの齒のやうな杉を背に並べて、湖

シセン
カスミ
コキユ
モガラ
ハルカ
ガツソウ

の方に流れてゐる。空氣が清い上にも清いので、近景の杉のこずゑも遠景の杉の峯も、新鮮な色をしてゐる。さうして其の間を薄い霞が流れてゐる。非常に靜かだ。自分の呼吸の外、うき世の物音は何も聞えぬ。唯此の天地を我が物顔に鳴きさへづつてゐるのは、小鳥だ。何といふかはゆい聲の小鳥があるものであらう。名がわからぬのが殘念だ。其處の杉のこずゑで一羽鳴いてゐる。向ふの杉のこずゑで他の一羽が答へてゐる。又遙か向ふの谷深く他の一羽が應じてゐる。よく耳を澄ますと、尙二三羽の聲が何處かで聞えるやうだ。此の小鳥の合奏を破るやうに、他の聲の小鳥が突然其の間に高音を張

ヱル
キジ
ウタガラ
キヲ

る。前の小鳥ほど優しい聲ではないが、又りゝしいところがあつて、其の音の空山に響く趣が何ともいへぬ。これも名がわからぬのが殘念だ。それも一羽ではない。三羽、四羽と、聞く中にだん〳〵殖えてくる。前の小鳥の聲が縱絲なら、此の小鳥の聲は横絲だ。互に入りまじつて、よく調和を保つところがおもしろい。突然けんけんけんと、けたゝましい音が谷を横ぎる。此方の谷にも響けば、彼方の峯にも響く。昨日聞いた雉子の聲よりもやゝ急調だ。或は山鳥であらうか。前の二つの小鳥が織成した美しい絹を、唯一聲に引割いたのかと疑はれる。しかし暫くして、其の聲は谷の底の底、峯の奥の奥にしみ込

んでしまつて、其の後は元の通り靜かになる。眞先に其の靜かさを破るものは鶯の聲だ。絹に置かれるかすりのやうに美しい。一のかすりが置かれると、又縱絲を織つて前の小鳥が鳴く。又横絲を織つて次の小鳥が鳴く。かすりが鳴く。縱絲が鳴く。横絲が鳴く。此の絹を又山鳥の聲が破るのかと思ひながら待ちまうけてゐると、不思議な聲が別に起る。それは麓の里の池で聞く蛙の聲によく似てゐて、谷の堂の鰐口が口を明いてつぶやくのかとも疑はれる。他の鳥の聲が皆高調で晴々とした中に、獨り低調で不平らしい音を出すのがおもしろい。一人の友はきつゝきだらうといつた。他の友は山鳩だらうといつた。

琵琶湖の上には、まだ漠々たる白雲が漂うてゐる。杉のこずゑを流れる霞は少しづつ薄らいで來て、だんくと谷が深く見えてくる。（高濱清「新寫生文」ニ據ル）

第五課　感情

人々の互に親愛するも、憎惡するも、尊敬するも、侮慢するも、主として感情の發動に基づくものなれば、感情の修練は人格修養の要件にして、處世上最も緊要なる事なり。仁愛慈惠は至善至美なる感情なれば、人は力めて此の感情を養ひ、常に他人の喜を以て我が喜とし、他人の憂を以て我が憂とするの精神を有すべきなり。然れ

トクギ
エコン
リハン
ヨクセイ
ジヨ

ども愛情の發動に任せて他の德義をゆるかせにし、或は其の好む所に偏して公平を失するが如きことあるべからず。

憎惡怨恨は交情の離反する基なり。故に此の感情の抑制には、絶えず意を用ふべし。人眞に我を憎むとも、我之に接するに慈愛の心を以てせば、其の人の心は自ら解くべく、眞に怨むべき人ありとも、怨に報ゆるに德を以てせば、其の人終に悔い謝すべし。怨に報ゆるに怨を以てするは、火を以て火に加ふるが如し。益、其の勢を長ぜんのみ。子貢、一言にして終身行ふべきものを問ひしに、孔子、恕の一字を以て答へたり。此の一字を守ること堅

フンド
ホツキ
ジヨウキ
イツシ
サイゲン
ヨクシカン
オモ合
シカル
イカル

ければ、憎惡怨恨に心を苦しむることなし。我若し他人の憎惡怨恨を買ふことあらば、我が智德の及ばざるを恥ぢ、反省して益修養の功を積むべきなり。

一時の憤怒を忍ぶ能はずして一身一家を滅したるもの、古今東西其の例に乏しからず。實に恐るべきは憤怒の情なり。人怒る時は感情益激するを以て、言行自ら常軌を逸し、冷靜の我にかへりて後悔すること多し。西諺にも、「怒の最後の瞬間は後悔の最初の瞬間なり。」といへり。怒るとも直ちに之を言動に發することなく、先づ心を冷靜にして、然る後、徐に之に對する處置を考ふべきなり。人を叱るにも決して怒るべからず。怒りて叱る時

は、言動自然に粗暴に流るゝを以て、人我に服せず、我自ら我が品位を下すのみ。怒を遷さざるも亦頗る難事にして、修養至れる人にして始めて之を能くす。故に顔回怒を遷さずとて、孔子はいたく其の賢なるを稱せり。他人の成功利達を見て不快を感ずるを、嫉妬といふ。無能なる弱者の有する感情なり。此の感情強きものは、人に排斥せられ、人と事を共にすること能はず。不幸にして我が心に此の感情の萌芽を認むるあらば、速に之を根絶するに力むべし。他人の美點長所は力めて之を推奬し、缺點短所は捨てて顧みざれ。憂懼は危險に伴なふ感情なり。天變・地異・疾病・災厄は何

時我が身邊に襲來せんも測り知るべからず。唯己が智能の及ぶ限を盡くして、然る後天命に任するものは、よく憂懼に遠ざかる。血氣の勇に逸りて死を顧みざるものは、共に謀るに足らず。又我が膽勇を示さんとして、みだりに危險恐るゝに足らずといふものは、獨り自ら快しとするも、識者の笑を免れず。危險を侮るものは眞の勇者にあらず。

第六課　ペスタロッチ

山水の美を以て鳴るスイスのチューリヒ市街頭に、粗服をまとへる一人物の、貧しげなる兒童を伴なひて立てる銅像あり。これ教育界千古の偉人ペスタロッチを記念

せるものなり。

ペスタロッチは西暦一千七百四十六年を以てチューリヒ市に生まれ、六歳父を失ひ、母の手一つに育てらる。幼き時より品性純良にして、人を愛するの熱情に富み、長ずるに及びて、救世濟民の念頗る盛なり。初め僧たらんと志して得ず、法政の學を修めしかども亦成らず、次いで荒蕪の地を開墾して貧民に産

業を授けんことを企てしが、此の事業も亦失敗に歸し、其の全財産を失ふに至れり。

こゝに於て一種の學校を作り、貧民の子弟を集め、農業に從事せしむると共に教育を施ししが、兒童の多くは怠慢にして勤勞をいとひ、食にあき暖を得れば遁走を企つる者さへ少からず。誠意に出でたる此の事業も、却つて非難の聲を以て報いられ、遂に學校を閉づるのやむを得ざるに至れり。然も堅忍不拔なるペスタロッチは、毫も失望することなく、自ら思へらく、此の失敗は余が計畫の粗漏なりしことを悟らしめたりと。これより蟄居十八年、專ら文章を以て世道人心に益せんことを力

め、一書を著して、教育の淵源は家庭にあり、家庭の中心は母にあり、母賢なれば家とゝのひ、一家とゝのへば一郷治り、延いて全國の民風自ら純良の域に進むべしとの意を寓せり。此の書忽ちフランス・ドイツの諸國に傳はり、人をして教育のゆるかせにすべからざるを知らしめたり。プロシヤの王妃ルイゼ、かつて難をロシヤに避くるの途、之を讀みて曰く、「我若し自由の身ならんには、自ら往きて此の人を訪ひ、全人類の名を以て深謝の辭を述べんものを。」と。

當時スイスも亦フランス大革命の餘波を受け、戰亂處處に起り、家を焼かれ親に離れて流離する者多く、スタ

ンツの町特に甚だし。ペスタロッチ卽ち單身スタンツに赴き、廢寺を以て學校とし、專ら兒童の教育に從事せり。此の時住民の窮乏は實に其の極に達し、子弟の教育の如きは何人も之を顧みる者なかりしかば、百方勸誘して八十人の兒童を得たり。其の中には、手足悉く吹出物におほはるゝ

あり、全身にしらみのたかれるあり。ペスタロッチは毫も之をいとはず、常に兒童と起居寢食を共にし、夜は兒童の熟睡するを見て始めて寢に就き、病に罹る者あれば、看護到らざる所なし。其の心勞察するに餘りあり。幾何もなくしてスタンツは再び戰場となり、其の學校は戰時病院として收用せられ、ペスタロッチはやむを得ずしてブルグドルフに移れり。

ペスタロッチのブルグドルフに至るや、自ら請ひて其の地の貧民學校の補助教師となりしが、同僚の忌む所となり、イバーダンに移れり。此の頃に至りて、ペスタロッチの精神的事業は漸く社會の注目する所となり、學者・教育家は言ふに及ばず、貴人の來り訪ふ者相次ぎ、ヨーロッパ諸國の政府も亦視察員を送るに至れり。ペスタロッチ大いに感奮し、老の身に至るを知らず、朝は二時に起き、先づ筆を執りて著述に從ひ、然る後課業に臨み、參觀の客到れば、諄々として說明して毫も倦むこと無かりき。斯くて西暦一千八百二十七年、八十二歲にして歿せり。

ペスタロッチの一生は、奮鬪努力の歷史なり。而して其の逸事の傳ふべきもの亦少からず。フランス公使のかつてイバーダンの學校を參觀せし時なりき。當時ペスタロッチは劇烈なる關節炎を患へて床中に在りしが、病を

力めて各教室を案内し、熱心に説明せしに、何時しか病苦を忘れて、遂に健康を回復せりといふ。又ロシヤ皇帝に謁見して教育の意見を述ぶるに當り、身の貴人の前に在るを忘れ、席を進めて帝の衣端をつかまんとして顚倒せしことあり。又或冬の日、乞食のはだしにて窓下を過ぐるを見、直ちに己が靴を脱ぎて之に與へ、己は藁を編み足にまとひて登校したりといふ。

ペスタロッチの偉大なるは、其の學術にもあらず、其の事業にもあらずして、實に其の精神にあり。彼は眞に人を愛せり。而して眞に人を愛するの道は、善く之を教育するにあるを信じたり。此の愛情と信念とを以て、終始一

貫、心身を捧げて教育の爲に盡くししなり。チューリヒ市街頭、行人旅客をして其の像下に低回俯仰せしむるもの、眞に故なきにあらず。

第七課　川柳

武藏坊とかく支度に手間がとれ
義貞の勢はあさりを踏みつぶし
尊氏はとはうづもなく逃げて行き
道問へば一度に動く田植笠
寢てゐても團扇の動く親心
長話とんぼの止る槍のさき
取次に出る顏のないすゝはらひ

黒犬をちやうちんにする雪の道
雨宿り額の文字をよく覺え
犬を見て猫は背中へ腹をたて
いゝ着物着ると内でもかしこまり
はしご賣まけると屋根へ掛けて見せ
知つた人ばかりへ強ひる子の給仕
いゝ所へ來たと背高使はれる
人を汲出して井戸がへしまひなり

第八課　噴油

一行の乘つた列車は、やがて西山停車場に着いた。油田は停車場から三四丁、一同は勢揃して其の方へと出か

けた。行く〳〵案内の人の語るを聞けば、此處の第四號井といふのは、ちやうど熱海の大湯のやうに、一日に十四五回、時を定めて石油が自然に噴上る。平生は油の逃げんことを恐れて、口をふさいで横の方へ油を吐出すやうにしてあるが、今日は珍客への御馳走にとて、口を明けておいてある。何時も二時か二時半頃に噴出すのが、今日に限つて折よく時が後れて、まだ噴出さぬところを見ると、ちやうど先方へ着く頃に噴出すかも知れぬとのことであつた。

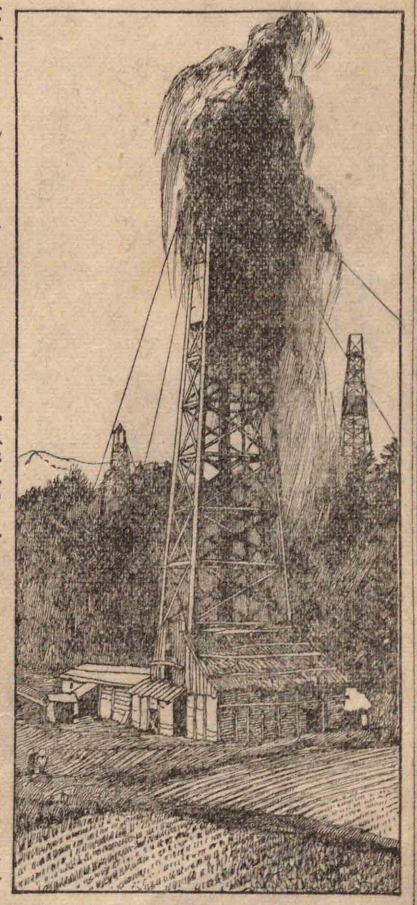
時計を見ると、三時少しまはつてゐる。思へば去んぬる明治二十六年六月二十六日の午後三時、加津保澤の油

井が突然油を噴上げ、地に溢るゝこと方五十間に及び、一晝夜に汲取るところ一千樽にして、尙油の置場に困つたといふ話がある。それ以來、石油自噴のことは諸方で時々傳へられたが、未だ親しく見たことはない。何だか樂しみなやうな心配なやうな氣がして、微かに胸の打騷ぐを覺えた。

忽ち「それ、出た。」と誰やらの呼ばはる聲が聞えた。ちやうど途中で、井戸櫓を建てるところ、それから井戸を掘るところ、掘終つていよ〳〵汲出すところなど、順々に見てゐる時であつた。すはやとばかり人々の指さす方を見やれば、如何にも、油ににじんで黑くなつた第四號井

の櫓が、赤土の小山を背景にして、すつくと立つてゐる。其の下の方から、赤犬の大きなのが、頭を振りながら何物かにざれ狂ふやうにうごめいてゐるのが見える。と見る間に、これがだん〳〵高くなつて、赤ちやけた大蛸が、頭をのべ脚をもがいて、によろ〳〵と飛上りかけては落ち、また飛上りかけては落ちるやうな樣になつて來た。それが落ちてまた上る毎に、一尺、二尺、一間、二間と、だん〳〵高くなつて行く。油が今し噴騰しかけたところである。一同は一語なく、どうなることかと眼を見はつて見てゐる。油はだん〳〵に落ちては高まり、落ちては高まる。其の邊に立働いてゐた人夫は、手に〳〵菰を

かぶり笠をかざして、右往左往に逃惑ふ。一天俄にかき曇つて、沛然として驟雨の將に至らんとするとき、先づぽたり〳〵と大粒の雨が先驅となつて落ちて來たときの光景を思はせる。



且落ち且上る間に、赤犬の頭が蛸の脚のやうになり、更に上つては、古い草雙紙の繪などにある波の花のやうに、粒々が小さく分れて、色は代赭から茶褐色に代つて、

次第に黃色に薄れて行く。やがて一ゆりゆつてふつと立つよと見れば、やゝ垂れ氣味であつた頭を急に立て直して、十五間の井戸櫓を、黃龍の天に昇るが如く、物の見事に突拔ける。それが又一ゆりゆれば、油は色白くぼけて、櫓の上六七間の高さに立上り、末は雲の如く霧の如く風のまに〳〵たなびいて、餘瀝さら〳〵と下なる板屋の屋根を打つ。並みゐる一同は、思はず手をうつて、歡呼の聲を上げた。山上山下、鑛場の彼方此方から拍手の音が聞える。身を挺して櫓の下に近づけば、噴出づる油は轟々と地響し、落下る油は夕立のやうに降りかゝる。

噴上ること約十分、最高二十餘間に達してからは、又次第に下つて、雲霧は黄龍となり、波の花となり、蛸の脚となり、赤犬の頭となつて、はては跡もなく消えてしまふ。消終つて十分とたゝぬ中に、又そろ〳〵と上りかけて、且下り且上る。二度目は前にも増して勢猛に、其の響も物々しい。大抵は二回にして終るさうだが、これで噴出する油の量は約二十石といふ。

此の井戸が出來て以來、最も多い時は一日に四百十二石、少い時でも三百十四石取れた。先月二十三日のことか、一度油の噴上つた時、どうした拍子か、之に火がついて炎々と燃上り、さながら火柱の立つたやうに、四時

間半燃續けた。其の火先が柏崎からも見えたといふ。初から火氣を絶つてはゐるが、それ以來人夫もあぶながつて、今日井戸口を明けるにも、危險だとて大分反對があつたといふ。

噴油が終ると、雨のはれ間を待ちかねたやうに、菰をかぶり蓆をかざした人夫が、續々歸つて來る。其の中には、ほゝかぶりした若い女が、柄の長い柄杓をもつて、ともすればよそに流れんとする油を汲んでゐるものもある。

一行は更に導かれて、他の方面の見物に向つた。（杉村廣太郎「ひとみの旅」ニ據ル）

九　セッパイ　ゴコロエ　ミラカイ　メイシ　ナレナイ　セキツ　ヒトエニ　ハイリヨ

第九課　旅行先より先輩へ

拜啓先日出發の際は種々御懇諭をかたじけなうし候のみならず御紹介狀御名刺等を賜はり御厚情謝し奉り候折角多數中より選拔せられての視察ながら兩人とも一向不馴の事とて唯々當惑致候ひしに御陰にて暗夜に光明を得たる心地致候一昨日當地着は豫定の通り夕刻に相成候が意外にも瀨川樣わざわざ停車場まで御出迎へ下され何かと御世話に相成候これも偏に御配慮の賜物と嬉しく存じ奉り候當地視察は瀨川樣の御紹介に

バッカンサク　アミカタ　サイバイ　ツイデ

より主として農事試驗場の方の御案内を受け麥稈眞田の編方とこんにやくの栽培とを一見仕候麥稈眞田の方は刈取の時期と保存方法とを改むれば我が村にても直ちに着手出來申すべく極めて有利の副業と存じ熱心に調査致候何れ委しくは歸村の上いろ〳〵申上ぐべく候明朝一番列車にて石岡に向ひ來る二十日歸村の考に御座候先づは御禮かたがた當地視察の大要申上げたく斯くの如くに御座候瀨川樣へは御序の折宜しく御禮の程願ひ上げ奉り候敬具

年　月　日

田代喜太郎

畑　謹一

豐田耕一郎様

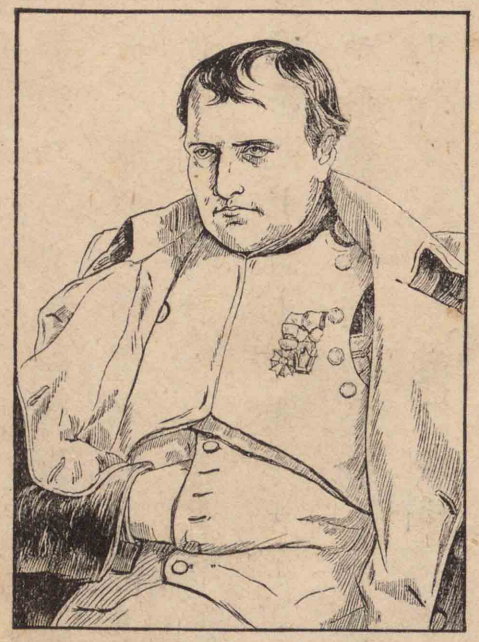
御座右

第十課　ナポレオン

一

十九世紀の英傑ナポレオンは、西暦一千七百六十九年、地中海上の孤島コルシカに生まる。幼時遭遇せし艱難辛苦は、つとに其の剛毅不屈の氣象を助成せり。十七歳にして士官學校を卒業し、砲兵少尉に任ぜらる。其の忠實と勤勉と克己とは常に上官の歎稱せる所にして、實

に他日赫々たる功業を成すの素質たり。彼かつてルソーの書をひもとき、異日ヨーロッパの天地を震撼するものは必ずコルシカ島民なるべしとの豫言を讀みて、大いに發奮せりといふ。



フランス大革命の起りしは一千七百八十九年にして、ナポレオン二十一歳の時なり。これよりフランスは殆ど無政府の狀態に陷り、革命黨の狂暴殘虐底止する所を知らず。一代の英雄が風雲に乘じて回天の事業を成すべき時は來れり。南フ

ランスの人士革命黨の暴政に激し、ツーロン市に據りて兵を起し、イギリス・イスパニヤ二國の聯合軍之を援く。ナポレオン、二十五歳の青年にして砲兵指揮の全權を與へられ、苦戰奮鬪遂に之を陷る。此の一戰によりて、ナポレオンの勇名頓に高し。二十八歳、一躍してイタリヤ侵略軍の司令官となり、連戰連勝、破竹の勢を以て諸城を陷れ、進んでオーストリヤの境を犯し、オーストリヤ皇帝をして地を割き和を請はしむ。其の凱旋してパリーに入るや、市民歡呼して之を迎へ、聲望一時に加る。オーストリヤ既に和して後、能くフランスに敵するものの、獨りイギリスあるのみ。ナポレオンは印度の通路を

斷ちてイギリスを窮地に陷れんと欲し、遠くエジプトに侵入して之を征服せり。

此の間に、イギリス・オーストリヤ・ロシヤ・ポルトガル・トルコ等の諸國、フランスに對し同盟を結び、兵を派して將にフランスの國境に迫らんとし、パリーの人心動搖す。ナポレオン之を聞き、部將をして代りてエジプトを統轄せしめ、急ぎ本國に歸りて議會を解散し、遂に第一統領となる。時に年三十一歳。

ナポレオンは破約の罪を鳴らしてオーストリヤ征討の師を起し、二軍を組織して自ら其の一軍を率ゐ、アルプの峻嶺を越えてイタリヤに攻入らんとす。時恰も晩

サンコウ
ラッナ
コウゼン
アニ
サタクル
ゲキハ
ツク
ジンヨウ
コウワ
ホコ
ザイセイ
ヘンサン
ブンゲイ
キンユウ
サクセツ
コウケン

春、積雪尚山谷を埋め、將卒其の行を危む。ナポレオン昂然として曰く、「豈余を妨ぐるアルプ山あらんや。」と。到る處オーストリヤの援軍を擊破し、將にウィーンを衝かんとす。オーストリヤ皇帝大いに驚き、再び和を請ふ。次いでイギリスも亦首相ピットの辭職により、フランスに對する政策一變し、一千八百二年、イギリス・フランス兩國間に講和條約の締結を見たり。

こゝに於てナポレオンは一時外征の鋒ををさめ、專ら力を内治に用ひて、財政を整理し、制度を改正し、法典を編纂し、教育を奬勵し、文藝を保護し、金融機關を創設し、運輸・交通の便を開く等、國政の改善に貢獻せし所擧げて數ふべからず。斯くてナポレオンは益〻民望を博し、一千八百二年、終身の統領に選ばれ、一千八百四年、終に國民多數の希望に依りて帝號を稱す。其の卽位式には、儀容堂々として場に臨み、ローマ法王より帝冠を取りて、手づから之を戴けり。

キボウ
ハンコウ
カイケン
ケイゴ
コウラク

此の年、ピット再びイギリスの首相となり、オーストリヤ・ロシヤ二國及びスエーデンと聯合して、フランスに反抗の態度を示せり。こゝに於て、ナポレオンはフランス・イスパニヤ二國の聯合艦隊を集中して海峽を警護せしめ、一擧にしてロンドンを攻落し、積年の怨恨を散ぜんとす。然れどもイギリス海軍の優勢なりしため、其の

計畫は失敗に終れり。ナポレオン切齒して曰く、「あゝ、余をして六時間イギリス海峽の主たらしめば、必ず世界の大王たるを得べきに。」と。而して此の聯合艦隊は、トラファルガーの一戰に、ネルソンの率ゐたるイギリス艦隊に擊破せられて、殆ど全滅に歸せり。ナポレオンの失意察すべきなり。

ナポレオンは、鋭鋒を一轉して東方に向ひ、三度オーストリヤに侵入してウィーンを占領し、オーストリヤ・ロシヤ二國の聯合軍をアウステルリッツに擊破す。イギリスの首相ピット此の報に接し、落膽の餘り、其の壁上に懸けたるヨーロッパ全圖を指さし、歎じて曰く、「此の地圖を撤せよ。今より十年間之を用ふるの必要なかるべし。」と。

ナポレオンは更に大軍に將として、プロシヤの軍をイエナに破り、進んでベルリンを陷れしかば、プロシヤ王、國都を棄てて東方に走る。ナポレオン之を追擊し、轉じてロシヤの大軍を粉碎す。其の用兵の機敏なること鬼神の如し。

二

ナポレオンの隣邦を征服するや、王國を廢して共和國とし、また改めて王國となし、一兄・二弟を國王に封じ、オーストリヤ・プロシヤ以外のドイツ諸邦をつらねてライン同盟を作り、自ら其の保護者となれり。今やナポレ

オンの威力はヨーロッパ全土を壓し、フランスの軍旗の向ふ處、將卒走り、帝王拜す。これより先、フランスは世界的植民政策に於て常にイギリスと競爭し、失敗を重ねしを以て、之を回復せんことは國民多年の希望にして、ナポレオンが征戰の目的亦終始之を以て一貫せり。然るにイギリスは海を隔てて大西洋上に國を成し、強力なる海軍を有し、常にナポレオンに反抗して其の雄圖を破壞せんとす。ナポレオン遂に意を決して大陸條例を發布し、ヨーロッパ各國に令してイギリスとの通商貿易を嚴禁せしが、其の抑壓に苦しむものはイギリスよりも却つて大陸諸國にして、フランス人も亦生活の困

難を感ずるを免れざりき。こゝに於て、ロシヤはスエーデンと同盟して其の命令に反抗せしかば、一千八百十二年、ナポレオンは四十五萬の大兵を率ゐてロシヤに侵入す。征途萬里、無人の境を行くが如く、長驅して舊都モスコーを衝く。時に天既に寒く、積雪滿地、軍を行るべからず。ナポレオン卽ち此處に留りて春暖の候を待たんとせしが、たまく火災起りて全都燒失し、屋舍の以て寒を防ぐべきなく、糧食の以て飢を凌ぐべきなし。豪邁不屈のナポレオンも亦之を如何ともすること能はず、遂に退軍のやむを得ざるに至れり。然るに堅氷廣野を鎖し、深雪行路を埋め、兵馬の凍死するもの其の數を

知らず。加ふるに勇敢なるコサック兵の機に乘じて掩撃するあり、四十五萬の大軍生きて還るもの僅かに二萬、其の中兵器を執り得るもの千人に過ぎざりき。

モスコーの敗報一度傳はるや、ヨーロッパ列國は踊躍して、積年の屈辱に報ゆる此の時に在りとなし、直ちに大同盟を組織して、一千八百十三年十月、聯合軍三十萬、フランス軍十七萬、ライプチヒの野に會戰す。ナポレオン能く軍兵を指揮し、防戰甚だ力めたれども、如何せん、衆寡敵せず、且其の兵士未だ多く訓練の功を積まず、實戰の經驗なかりしを以て、フランス軍終に利あらず。ナポレオンのがれてパリーに歸る。聯合軍は四方より進擊

して國境を壓し、翌年三月遂にパリーを陷れ、ナポレオンを地中海上のエルバ島に配流す。

こゝに於て、列國は會議して新にフランス王を立て、更に全權委員をウィーンに會して、ナポレオンの侵略せし領地を各國に返し、新に境界を定めしむ。此の會議に於て、列國委員は各其の本國の利益を主張し、議論區々にして容易に決すべくもあらず。此の間に、ナポレオンはエルバ島を脱出し、突如としてフランスの南海岸に上陸したり。多年恩顧の將卒爭ひて馳集り、皇帝萬歲の聲沸くが如く、ナポレオンは双に血ぬらずしてパリーに入り、直ちに帝位に卽く。急報四方に飛んで、ヨーロッパ全

土また色を失ふ。各國再び聯合軍を組織して、一千八百十五年六月、ナポレオンの軍とワーテルローの野に戰ふ。此の一戰は實にナポレオンが盛衰浮沈の分るゝ所なれば、畢生の智勇を振るひて奮鬪せしが、イギリスのウェリントン善く防ぎ、プロシヤのブリュッハー亦奇兵を用ひて其の側面より迫りしかば、フランス軍大敗し、ナポレオン僅かに身を以てのがる。其のパリーに還るや、皇位を其の子に讓らんとして成らず、遠くアメリカにのがれんとして得ず、百計こゝに盡きて、終にイギリスの軍艦に投降す。其のパリーに入りて再び帝位に上りしよりこゝに至るまで約一百日、世に之を百日天下と

稱す。列國協議して、ナポレオンを大西洋上の孤島セントヘレナに流し、イギリス之が監視の任に當る。これより配所の月に對して榮華の昔をしのびつゝ、憂憤六年、五十三歳を一期として此の孤島に歿せり。

ナポレオン常にいへらく、「不能といふ語は唯愚人の辭書に在り。」と。然れども勢に乘じて自ら制することを知らざるは人間の弱點にして、失敗の基常にこゝに存す。希世の英傑ナポレオン亦此の凡情を脫する能はず。ヨーロッパの天地を震撼し、帝王の帝王と歌はれたる身を以て、空しく絶海の孤島に憤死せる其の末路、何ぞそれ哀なる。

十一

ゼメラ
サヾダイ
ヘンカ
ハンペク
ヨウイマン
ケイナイ
アカツキ
シヨウヨウ
アンエウ
アイタイ
ゲウアイ
シキサイ
シヨウサン

第十一課　空の景色

空の景色の壯大美妙なること、到底地上の景色の及ぶところにあらず。地上の景色は多く同一變化を反復し、其の變化亦緩漫なれども、空の景色の千變萬化窮りなきや、瞬時も同一狀態に止ることなし。

鷄鳴曉を報ずるや、東天一帶の曙光は夜の暗黑を破り、靉靆たる曉靄は、白となり、黃となり、紫となり、淡紅色となり、深紅色となり、其の他名狀すべからざる幾多の色彩を呈しつゝ、次第に消散して、光まばゆく差出づる朝日の美しさ。これ朝々見る所にして、然も朝々相同じからず。

ヘキクウ
ウヨクウイ
エンレツ
タキマチ
クモリ
カウ雨

一點の雲もなく晴渡れる碧空は、最も人の心を爽快ならしむ。されど雲有るは更に雲無きに勝れり。空の景色に無限の變化を生ずるは、實に雲有るがためなり。雲は離合集散常なく、其の起るや、來る所を知らず、其の散ずるや、往く所を知らず。時々其の形を改め、刻々其の色を變ず。炎熱燒くが如き夏の日、奇峯の如き白雲天の一角に現るゝや、奇峯更に奇峯を生み、數峯合して一峯となり、一峯分れて數峯となり、一峯崩れて一峯又忽ち現る。一天かき曇りて、强風吹きすさび、黑雲空をかすめて飛びちがふ樣は、蛟龍の玉を爭ふが如く、天馬の空を驅くるが如し。驟雨將にはれんとして、暗雲の絕間をもるゝ

國會圖書館藏

日光は、金箭を發射して周圍の雲を照らし、やがて空中に七色の虹を現ず。

風高く渡る秋の空、白雲疊々、大理石を敷列ねたるが如く、波紋の形に變じては、白波の天上に起るかと疑はしむ。朝日・夕日のこれに映ずるや、忽ちにして瑪瑙の如く、又忽ちにして琥珀の如し。

夕陽將に沒せんとする時、山の端に立籠めたる晩靄の、或は濃く、或は淡く、千種萬別の色に染めなさるゝは、曉の空に似たり。唯彼は次第に明るく、これは次第に暗し。

夜の空には月あり、星あり。月の美觀は古來詩歌に歌ひ、繪畫にゑがけるもの頗る多し。月も亦雲によりて一層

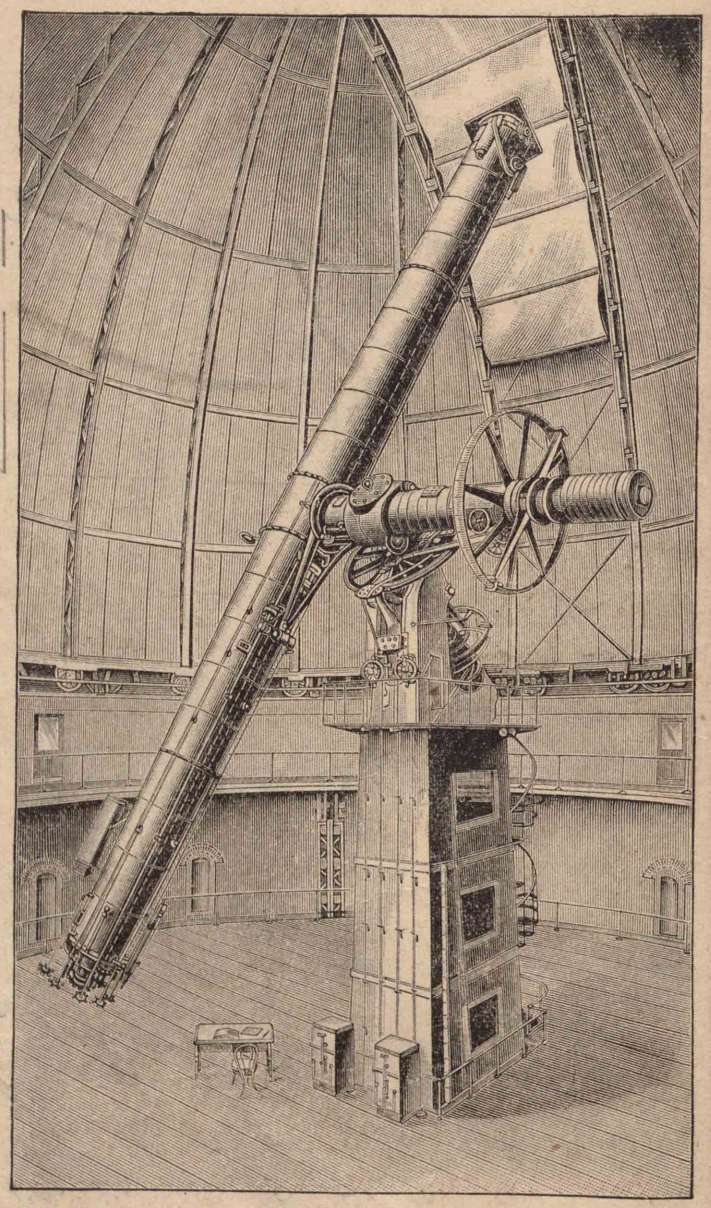
其の美を加ふるものにして、薄雲に覆はれたる春の夜の朧月は夢よりも淡く、秋風にたなびく雲の絶間よりもれ出づる月影は鏡よりもさやけし。或夜ひそかに出づる五月雨の松の月など、興趣最も深からずや。さえ渡れる大空に無數の星辰を望むときは、宇宙の洪大無邊なるを想ひて、莊嚴の感に堪へざるべし。

空の景色は地上の景物を待たずして其の美全けれども、地上の景色は空の景物をかるにあらざれば十分に其の美を發揮すること能はず。花・紅葉は太陽の光に照らされて始めて諸種の色澤を現し、山水の風景は雲霧霞靄の配合に依りて雨奇晴好の趣多し。千古の雪を戴

ける富士の高嶺も、一抹の白雲其の山腰をかすむる時、益、雄大の觀あり。霞の奥にも尚花あるを思はしむる時、吉野山一目千本の光景は、殊にゆかしきを覺ゆるにあらずや。

第十二課　望遠鏡と顯微鏡

望遠鏡は、遠い處にある物體を近い處にあるやうに見せる器械で、最も精巧なのを用ひると、實距離の千分の一の處から觀望するのと同一の結果が得られる。それ故、約三十八萬四千キロメートルの遠い處にある月も、約三百八十四キロメートルの處から見るのと同じになる。此の器械は三百年程前オランダで發明されたもので、初は甚だ不完全であつた。イタリヤの星學者ガリレオが種々改良を加へてから頗る精巧になつて、終に



ハンテン
コウサク
ロンワ
セイミツ

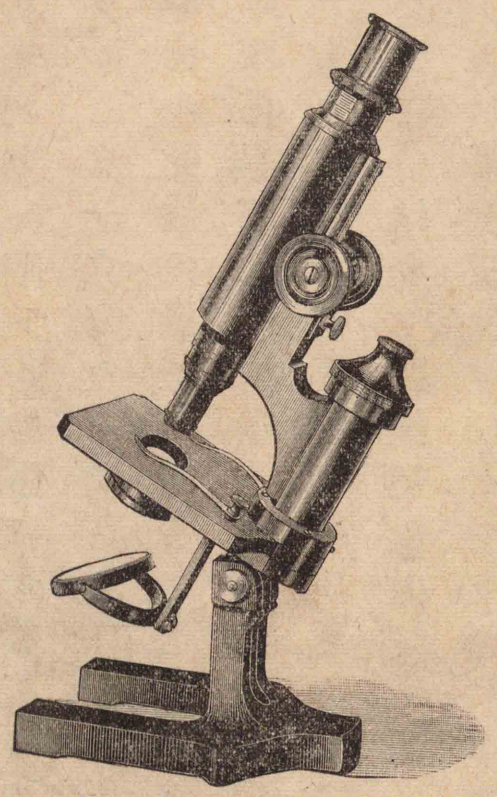
星學の研究にも使用することが出來るやうになり、ガリレオは之を以て天體に關する種々の新事實を發見した。太陽の表面に斑點のあること、月の表面に山のあることなどの明らかになつたのは、皆此の人の功績である。

其の後も望遠鏡は漸次改良されて、其の構造の進歩するに隨ひ、効用も大いに廣くなつた。近時星學が非常に進んで、天體の觀測が愈〻精密になり、新しい天體も多く發見されることになつたのは、全く望遠鏡の賜物である。

小さいものを大きく見せる顯微鏡も、望遠鏡に續いて

ホドロク
カ
ヒフ

間もなく發明され、多數の學者によつてだん〳〵改良されたので、今日では驚く程精巧になつて、隨分微細なものまでも見ることが出來るやうになつた。



顯微鏡を以て蚊の口をしらべてみると、動物の皮膚に穴をあけるきり・のこぎりのやうなものと、血を吸ふ管のやうなものが備つてゐることがわかり、蝶の羽に着いてゐる粉

ネンド
イタイ
サイキン
トクシュ

をしらべてみると、其の粉は悉く美しい羽毛の形をしてゐることがわかる。又海底の泥をしらべた結果、一立方センチメートルの中に十餘萬の動物が生活してをり、同じく一立方センチメートルの粘土の中に、約百五十億の動物の遺體のあることがわかつた例がある。近時細菌學が大いに發達して、特殊の形質を備へたバクテリアが種々の傳染病の病原となることも明らかになつたのは、全く顯微鏡の力である。

第十三課　バクテリア

十三
ガイ

バクテリアは極めて微細な生物で、顯微鏡を用ひなければ見ることが出來ない。其の最も微細なものに至つ

ラクダイ
ミジカイ
エンセキ
タイサイ
ズイ
カテイ
ヨウセキ

ては、數千倍以上に擴大しても、なほ之を見ることが出來ないものもある。

バクテリアには、球狀のもの、短い圓柱狀のもの、螺旋狀のものがあつて、形は一樣でない。其の繁殖は大概自體の分裂によるもので、外界の事情が最もこれに適するときは、約二十分乃至三十分毎に一回の分裂をする。今一時間毎に一回の分裂をするものと假定しても、一箇のバクテリアは一時間の後に二箇となり、二時間の後には四箇となり、三時間の後には八箇となり、一晝夜の後には千六百七十七萬七千二百十六箇の大數となる。斯うして五日の後になると、其の容積は全世界の海洋

をもうづめるくらゐになるであらう。しかし實際にはこんな大繁殖をする餘地もなく、又榮養分も之に伴なはないから、終には其の分裂を止めるやうになるのである。

バクテリアは到る處に生存してゐる。其の人體に寄生するものの中には、無害のものもたくさんにあるが、コレラ・腸チフス・ヂフテリア・ペスト・結核等諸種の傳染病の原因をなすものもある。是等のバクテリアは、實に人類の强敵といつてもよい。けれども健全な身體にはいつては繁殖することが困難なものであるから、我等は常に身體を健全にして、其の暴威をたくましうする餘

地がないやうにすることが肝要である。

バクテリアは其の種類が甚だ多く、中には何等の害を及さないばかりでなく、却つて人類の益を爲すものも少くない。酢・醬油・味噌・納豆などは醱酵によつて作られる食用品で、此の種の醱酵の作用はバクテリアの力による。又バクテリアの中には、地中に繁殖して植物の生育を助けるものもある。

物の腐敗するのはバクテリアの作用であつて、我等人類の不利益となることが多いけれども、若し世に腐敗といふことがなかつたならば、果してどんな結果を見るであらうか。太古より今日に至るまで死滅した生物

十四
アトシカモ
フラゼラレ
コウロク
コマ
チヤクシ
ヨロヒ
グンワ

の屍は、地球上到る處に累々として、慘澹たる光景は實に見るに堪へないであらう。幸にして此の慘狀を見ないのは、主にバクテリアの功といはなければならぬ。

第十四課　阿閉掃部

結城秀康越前に封ぜられし後、阿閉掃部とて武功の譽ありし者を、厚祿にて召抱へけり。又狛伊勢とて、これも國にて世祿の歴々なりしが、嫡子に鎧の着初せさせけるに、彼の掃部を招待して、子に鎧着することを賴みけり。さて祝の杯に及びし時、伊勢「今日は愚息が鎧の着初にて候ふまゝ、御身の御武功の事御物語り候ひて、彼に御聞かせ候へ。」といひしに、掃部「いや、某が身の上に、御話

ムシヤブリ
シツガタケ
イツキ
ツタヘカ
フレヨウ

し申すべき程の武功は覺え申さず候ふ。されど御望もだし難く候ふまゝ、某一生の中に武者振の見事なる士を一人見申して候ふ、其の事を話し申すべし。江州賤嶽の戰に、暮方に某一騎余吳湖のわたりを引き候ひしに、敵と思しくて後より詞をかけし故、馬を引返し候へば、其の人申し候ふは、『運拙く、今朝より好き敵に會ひ申さず候ふ。御人體を見受け、幸とこそ存じ候へ。不肖ながら御相手になり申すべし。』とて進み寄り候ふ故、『それこそ此方も望む所にて候へ。』とて、互に馬を乘放し、既に槍を合はせんとしけるに、其の人、『しばし御待ち候へ。今朝より雜兵を多く突き候ふ故、槍よごれて候ふまゝ、槍を

イトマ
ジンヨウ
ラウシ
ハンカシ

洗ひ候うて御相手になり候はん。」とて、余吳湖に槍を打ちひたし、二三べん洗ひ、「さらば。」とて突合ひしが、久しく勝負なかりし程に、日も暮果てて物のあやめも見えずなりぬ。其の時彼方よりまた詞をかけ、「もはや槍先も見えず候ふ。御殘多くは候へども、これまでにて候ふ。御暇申し候ふべし。御名こそ承りたく候へ。某は青木新兵衛と申す者にて候ふ。」とて、某が名をも承り候うて、「此の後又陣頭にて出合ひ候はば、互に人手には懸り申すまじく候ふ。若し又味方になりて候はば、わりなく入魂致し候ふべし。さらば。」とて立別れしが、これ程見事なる武士は遂に見侍らず。如何成果て候ふにや。」と語りけり。其の

ワキリサン

頃、伊勢が許へ心安く出入する青木方齋といふ浪士あり、其の日も來て勝手に居たりしが、此の物語を聞きて、勝手よりにじり出で、掃部に向ひて、「さても唯今の御物語を承り、今更昔を思ひ出で、涙を落してこそ候へ。其の時の御相手になり候ふ青木新兵衛は、恥づかしながら我等にて候ふ。斯く申すばかりにては、浮きたる事に思すべく候ふ。」とて、其の時の雙方の鎧のをどし、馬の毛色を一々言ひけるが、一つも違はざりければ、掃部驚きて、「さて〳〵久しくて會ひ候うて、本望に候ふ。」とて、手前にありし杯を方齋にさし、之をしるしにとて、腰の脇差を拔取りて贈りけり。それより方齋が名國に高くなりし

程に、秀康の耳へも達せしかば、掃部と同じ祿にて召出されけりとぞ。靑木が武者振の見事なるはさる事にて、阿閉が彼が事を言出で、名のり合ひて喜びし、又伊勢が子の鎧の着初に掃部を招きて、子の爲にとて武功の物語を望みし、何れもさしたる事にてはなけれども、其の頃の士風武を嗜みしこと知られたり。（「駿臺雜話」ニ據ル）

第十五課　租税

國民の福利を增進し、安寧秩序を保持するため、國家として爲すべき事業は甚だ多い。是等の事業を遂行する費用に充てる目的を以て、人民より徵收する財貨を、租税といふ。政府の收入には、手數料・官營事業の收益などいろ〳〵あるが、其の過半を占めるものは、卽ち此の租税である。

國家に於けると同樣に、府縣市町村に於ても、各其の地方自治團體の繁榮を圖り幸福を進めてゆくためには、諸種の施設經營が必要であるから、其の費用に充てる目的を以て租税を徵收する。

昔は東西何れの國でも、租税として現品を徵收したり、勞力を賦課したりしてをつたが、此の方法は政府にもまた人民にも種々不便があるので、今日の文明諸國では、皆貨幣を以て之を納めるやうになつた。例へば我が國でも、古く租庸調の制度があり、德川時代になつても、

大抵現品又は勞力を賦課して來たが、明治維新以後は、各種の租税は概ね貨幣を以て納めることとなつた。

租税の中で、地租・所得税・營業收益税・相續税・酒造税・關税等、政府の徴收するものを國税といひ、國税附加税・家屋税等、府縣の徴收するものを府縣税といひ、國税・府縣税の附加税、及び戸數割等、市町村の徴收するものを市町村税といふ。

國税には直接税と間接税がある。地租・所得税・營業收益税の如く、直接之を納める者の負擔に歸する租税を直接税といひ、酒造税の如く、之を納める者は製造人であるけれども、實際の負擔は間接に消費者の上にかゝる

租税を、間接税といふのである。關税も亦其の性質は後者に屬する。

租税は、課税標準を定め、之に一定の税率を乘じて算出するのである。課税標準は租税の種類によつて異なるのであつて、例へば、地租に於ては賃貸價格、所得税に於ては所得金額、酒造税に於ては酒類の製造石數等の如きものが、課税標準となるのである。

一家の繁榮するに隨ひ、其の經費が增加すると同じく、國家に於ても、地方自治團體に於ても、其の繁榮に伴なつて經費が膨脹し、國民の負擔すべき租税の增加するのは、固より當然の事である。我が國に於ても、明治二十

七八年戰役前の租税收入は僅かに七千萬圓に過ぎなかつたが、明治三十七八年戰役後には貳億八千萬圓になり、世界大戰後には七億參千萬圓に增加し、大正十四年度には實に八億九千萬圓の巨額に上つた。

租税は國民生活に直接影響するところが大きいから、新に租税を賦課し又は税率を變更するには、國税に於ては帝國議會の協賛を要し、府縣税・市町村税に於てはそれ〴〵府縣會・市町村會の議決を要する。

凡そ納税と兵役は國民の負擔すべき二大義務である。我々は、常に國家並びに地方自治團體の隆昌を思ひ、進んで其の義務を果す覺悟がなければならぬ。

第十六課　水と風景

江山の勝といひ、林泉の美といひ、風光の佳麗なる處、水色の添はざるはなし。

四面海をめぐらせる我が國には、到る處長汀曲浦の眺乏しからず。彼の日本三景を始とし、舞子の濱・和歌の浦・三保の松原等は何れも海濱の勝地として名高く、特に瀨戸内海の風光は世界に冠たりと稱せらる。

琵琶の湖水を外にしては近江八景なく、中禪寺湖・蘆湖を除きては日光・箱根の勝もいふに足らざるべし。中禪寺湖の水は懸つて華嚴の瀧となり、はしつて大谷川となり、綠樹紅葉の間に隱見する所、日光山、林谷の美あり。蘆

湖より落つる早川の溪流は、玉と碎け雪を噴き、行く行く浴樓の下を廻りて遊人の耳目を洗ふ。

耶馬溪は奇石怪岩を以て聞ゆれども、山國川の此の間を流れて、淵となり、瀨となり、瀧となりて奇觀を添ふるにあらずんば、いかでか鎭西の絶景たる名稱を專らにするを得んや。木曾山中の偉觀は、老樹の鬱々として晝尙暗きにあれども、木曾川の流るゝありて、其の景に光と色とを與ふるなり。月の瀨の梅も水によりて趣を增し、高雄の紅葉も流に映じて錦を漂はず。

れんげさう・たんぽゝの咲滿ちたる春の野を流るゝ一條の水、竹籬の外より入りて石に隨ひて曲折する庭園の細き流、其の景趣を添ふること幾何ぞ。朝日も、夕日も、月も、星も、水に映じて美しく、ほたるも水邊に亂れ飛ぶによりて風情殊に多し。

水の豪壯は天をうつ怒濤に見るべく、地を震はす飛瀑に見るべく、岩石を提げてはしる急流に見るべし。平和は洋々たる春の海に在り、岸遠く山遙かにして、白帆風をはらんで下るの長江に在り。靜寂は水面鏡の如くにして、蘆荻岸に疎に、山禽時に來つて翼を洗ふの沼澤に在り。

第十七課　天然記念物

我々の住んでゐる此の地球上には、數限も知れない天

然物が存在する。それ等の中には、學問上から見ても、風致上から見ても、非常に貴重なものがたくさんにあるが、世の中が開けるに隨つて、其の或物は次第々々に毀損されて行く。今毀損の原因の主なものを擧げてみると、其の物の價値がわからないために、知らず〳〵の間に破壞されることもあり、或は不慮の災害によつて損はれることもあるが、多くは文明の進歩と共に、天然物其のもの、又はそれの存在してゐる土地を利用することが益〻多くなるため、又工業の進歩發達につれて、煤煙や有毒瓦斯等の發生が多くなるためである。そこで世界各國では、それ等動物・植物・地質・鑛物等の中で、絶滅に

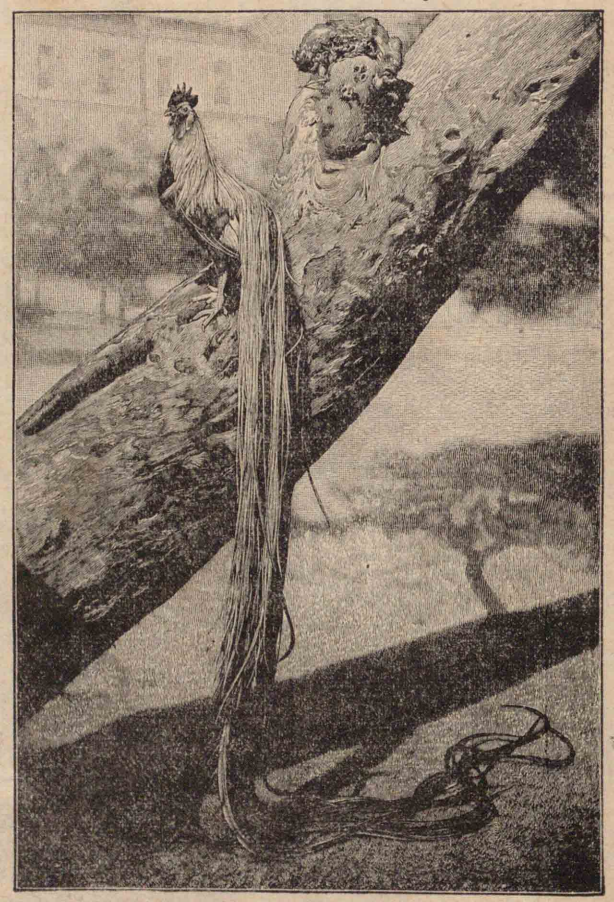
瀕したもの、又は其の代表的標本ともなるべきもの、卽ち自然界を記念すべきものを總べて天然記念物と稱して、其の保存に大いに力を注いでゐる。

我が日本國は、氣候が比較的溫和で、雨量が多く、國土が寒帶から熱帶に及んでゐる等の關係上、動物・植物の種類が非常に多く、隨つて天然記念物に富んでゐる。これは我が國の誇とするところであるが、今にして保存に力めなければ、終には此の誇を失つてしまふおそれがある。政府もこゝに着目して、大正八年これが保存法令を發布し、其の指定により、着々と保存の方法を講じてゐる。しかしかやうな事は、單に法令の力によつてのみ

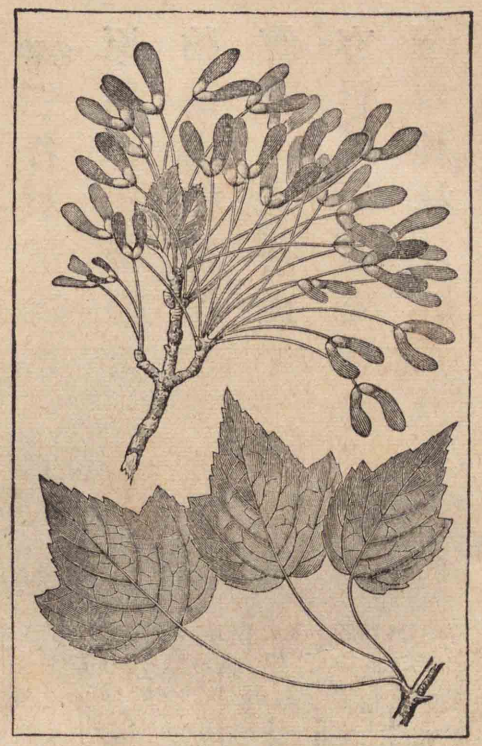
成し遂げられるものではなく、國民各自がよく其の尊ぶべき所以を解して、共に力を盡くさなければならぬ。

今我が國に於ける天然記念物の例として二三のものを擧げてみると、動物に關するものでは、日本固有の動物たる鹿兒島縣奄美大島のるりかけす・黑兎、或は岐阜縣・岡山縣等に產し、東部アジヤの珍奇な動物として知られてゐる大山椒魚の類がある。又飼育によつて著しい變化を生じた高知縣の長尾鷄などもそれである。其の他特殊な動物の繁殖地又は渡來地としては、青森縣に於けるうみねこ繁殖地、鹿兒島縣・山口縣に於ける鶴の渡來地なども保存の指定を受けてゐる。

植物に關するものでは、社叢（神社の森）・名木・巨樹・原始林・珍奇植物・高山植物帶等がある。奈良春日神社のなぎの純林は社叢の代表的のもの、奈良八重櫻・高砂の松・尾上の松・曾根の松は、或は珍種として、或は樹形のりつぱな點から、名木として保存されてゐる。又鹿兒島縣蒲生の樟は、目通りの周



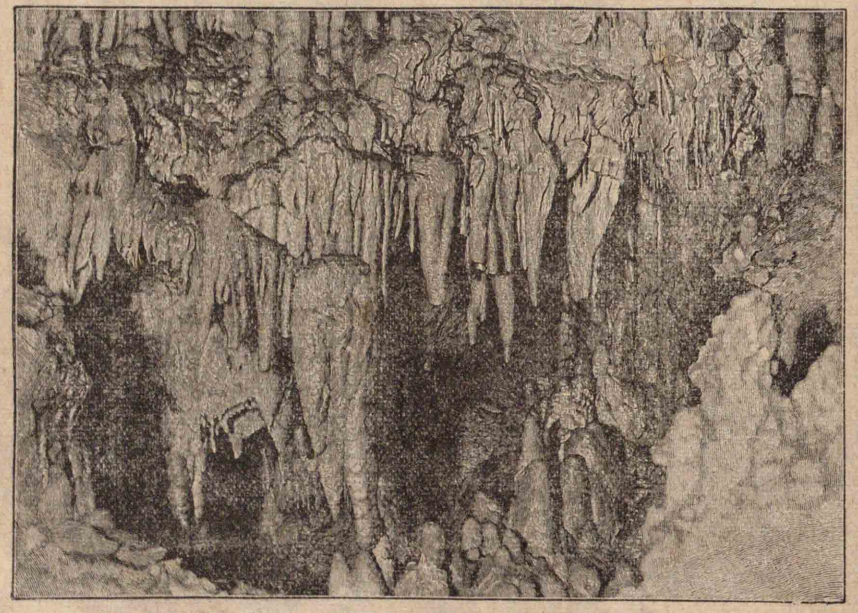
圍七丈五尺に及ぶ日本第一の巨樹である。珍奇植物の一例としては、岐阜・長野・愛知三縣の縣境附近に産する花の木があり、原始林としては、北海道の野幌、奈良縣の春日山、鹿兒島縣の屋久島等が有名である。其の外、白馬連山にある高山植物帶も、一指定地としてみだりに其の中の植物を採取



することを許されない。地質・鑛物に關するものでは、山口縣・大分縣に存する鍾

乳洞、滋賀縣石山寺にある珪灰石の大露出等が其の例である。

由來我が國は自然の恩惠に浴することが多く、隨つて國民は昔から自然界を愛護する情に富んでゐる。徳川時代に、各藩が其の領内の名勝・老樹・名木・岩窟などを保護し、或は留山と稱して名山の樹木を伐採す



ることを禁じたことや、一種の地理書ともいふべき名所圖會等に、名木・珍獸等を紹介してゐるのでも明らかである。今や世界の國々は、それ〴〵天然記念物の保存に力を注いでゐる。早くより此の美德を有した我々日本人が、之に對する用意をゆるかせにして、天與の寶を空しく毀損してはならぬ。

第十八課　由利八郎の意氣

文治五年、源頼朝奥州の藤原氏を滅しける時、泰衡の郎從に由利八郎といひけるもの、宇佐美實政にとりこにせられけり。然るに天野則景、由利をとりこにせるは我なりと言爭ひければ、頼朝人をして、先づ馬の毛色、鎧の色目等、二人が其の日のいでたちを取調べさせ、さて梶原景時に命じ、八郎に實否を尋ね問はしめけり。

「汝は泰衡の郎從中にて名有るものなれば、よも僞は申さじ。汝を生捕りたる者は何色の鎧着たりしか、有體に言上せよ。」

と問ひぬ。八郎之を聞くよりくわつと怒り、

「汝は兵衛佐殿の家人なるか。過分の口狀たとへんに物なし。我が舊主は秀郷將軍の嫡流として、三代相續して鎭守府將軍たり。汝の主人とても、今の如き無禮の語を發すべからず。武運拙ければこそめしうどと

はなつたれ、鎌倉殿の家人として、奇怪至極の振舞なり。汝が問ふ所には返答出來難し。」

と、口をつぐみて何事も言はざりけり。景時顔赤らめて引退き、此の由頼朝に復命しけり。

頼朝重ねて畠山重忠を召して尋問せしめけるに、重忠は手づから敷皮を取つて先づ八郎を坐せしめ、禮を正して言ひけるは、

「弓馬にたづさはる身の生捕となること、和漢・古今其の例少からず。永暦中、故左馬頭の横死せられし時、二位もめしうどとして六波羅に引かれ、遂に伊豆に流され給ひしが、今は武運再び開けたるなり。和殿も今

は生捕の名を蒙れども、斯くて沈み果つべきにもあらじ。和殿の武名は豫てより隱れ無ければ、勇士等は生捕にしたる勳功を言爭ふなり。何色の鎧着たる者に生捕られ給ひしか、具に語り給はんや。」

と詞靜かに尋ねければ、八郎つくづくと聞きて、

「豫て聞及びたる畠山殿よな。禮儀を正しくして問はるゝこと、前の男の奇怪なるとはうつて變れり。いかでか答へ申さざらん。黑絲をどしの鎧を着、鹿毛の馬に乘りたる者こそ、先づ我を引落したれ。其の後追來れる者は、混雜の中なれば色目も覺えず。」

と答へけり。重忠歸りて斯くと申しければ、彼の鎧・馬は

實政のものとわかりて、則景の申條は立たざりけり。さるにても彼のめしうどの意地の強さよ、必ず勇敢なる武士ならんと、頼朝やがて召出して言ひけるは、

「汝の主人泰衡、威勢を兩國の間に振るひ、十七萬騎の首領たりしに、百日も支へずして一族滅亡し、あまつさへ郎從河田の手にかゝりて殺されしこそ、餘りといへば不覺ならずや。」

となじり問ふ。八郎答へて、

「故左馬頭殿の威勢は海道十五箇國をなびかししに、平治の亂には一日も支へず、數萬騎の主として、もろくも長田のために殺され給ひしにあらずや。泰衡の

管領せられしは僅かに二箇國なり。さるを數十箇日を支へしこと、いかでか不覺なりといはん。」

と憚る所なく答へければ、頼朝は益〻其の意氣の盛なるに感じけり。

第十九課　夏の曉

一

殘れる月の　影踏みて、
歌ふ唱歌も　さわやかに、
小川のほとり　牛飼へる
村の男の子が　胸の邊を、
吹くや朝風　そよ〳〵と。

カミ
アサゲ
ウララカ

働く身には　憂なし。

二

またゝく星を　戴きて、
露の白玉　踏みしだき、
向ひの岡に　まぐさ刈る
里の少女が　前髪を、
吹くや朝風　そよ〳〵と。
働く身には　憂なし。

三

朝食（あさげ）の煙　うちなびき、
仰ぐ日の出の　麗かに、

アフルル
カゴ

小牛追ひつゝ　歸る子が、
吹くや口笛　勇ましく、
生氣溢るゝ　朝ぼらけ、
働く身には　望あり。

四

家路を急ぐ　少女子が、
籠に添へたる　白百合の、
にほへるまみの　にこやかに、
足の運も　いそ〳〵と、
生氣溢るゝ　朝ぼらけ、
働く身には　望あり。

かるそうに

第二十課　中吉の誠實

江戸に諸崎某といふ人あり。豪富の米問屋なりしが、或年、伊勢參宮の歸るさに、遠州佐夜の中山に休らひ、處の名物飴の餅を食ひける時、多くの子供等集りて、羨ましげに見るければ、殘の餅を分ち與へけるに、十歳ばかりの童一人は、牀机によりてつぶやくやう、「人の餘し食物など、いかでもらひて食ふべきか。」といへる物ごしの耳にとゞまり、童の樣子をうかゞふに、負ひたる子を背より下し、介抱しつるしこなしの懇なること尋常ならず。諸崎此の樣を見て、茶屋の主に向ひ、「幼き子を負ひたる童は、何處の家のものぞ。」と問へば、「此の山陰なる農夫

の子なり。此の程こゝら不作にして、すぎはひしがたき者多ければ、我等も此の童を引取りて家に養へるなり。童は親の質を繼ぎてや、性直にしてゆがめるを嫌ひ、道具などにても、曲りてあれば人知らぬ間にたゞし置き、己が食にあらざれば食はず。訥辯なれどもよく用をとのへ、善を語りて惡を言はねば、あはれみ養ひ侍りぬ。」といふ。諸崎頻に江戸に連歸りたしといへば、「それこそ彼が幸ならめ。」と、親の許に告げやるに、喜び來りて、主と共に奉公の事を賴みつれば、こゝに主從の契約をなし、中山にて得し者なれば、とて、中吉と改め、召仕ふ。十年の勤私なく、總べて主人の非を擧げ諫むることしばく

なれば、忠言耳にさかふのならひ、終にはうるさく思はれ、果は不興を蒙り、二十の年に身を退き、親しくせし方をたよりて、暫しが程は忍びけり。

財集れば奢に傾くは人のならひ、彼の諸崎も自ら心のゆるみ出できて、家さへ人に打任せ、奢にふける程に、名におふ豪富の家なりしかども、終に財寶を遣ひ果して、逆井といへる片田舎に潜み隱るゝに至りぬ。斯くて持傳へたる道具の類を煙の代となしつゝも、三年ばかりを送る中、身は生を養はざるにつかれ、すみかは明暮の乏しきにくづれ、終に疫にさへ犯されて、死を待つばかりとなりぬ。彼の中吉は導引の業をなりはひとしつゝ

世を過ししが、主人の病篤しと聞くより、急ぎ逆井の里に赴き、强ひて看病の勤を願ひ、不興をゆるされ、介抱に心を盡くしぬ。されども其の日を送る貯だに無ければ、晝は野菜を商ひて飲食の助となし、夜は導引を事として主人の藥の料を得、誠忠至らずといふことなし。

さる程に、諸崎追ひ〳〵快方に及び、起ち居も常に違はずなりければ、或時中吉主人に向ひ、黄金五兩を取出して、「いさゝか思ふところ侍れば、暫しの暇賜はりたし。これより浪華に赴きて、主家を再興すべし。願はくは之を元手とし、暫く此のあたりに小商して待ち給へ。」とて、涙ながらに願ふにぞ、主人も感涙をとゞめかね、彼の金の

中よりそこばくを割きて旅費にといへど、「旅行に財は妨なり。習ひ覺えし導引の業こそ、誠に旅の元手なれ。」と受けず。斯くて浪華に赴き、彼の業をたよりとして日日堂島邊を徘徊するうち、算筆の道に暗からざることを或富家の主の目にとまり、身の素性を問はれければ、中吉事のよしを詳に物語る。富家の主其の志に感じ、主家を起すの忠節なれば力を貸さんといへるにより、中吉いたく喜び、こゝに諸崎を浪華に迎へ、主從心を合はせて一家の再興に盡くしぬ。諸崎、彼の中吉が忠功を表さんとて、四角の内に「中」の字を入れて之を家の印とせり。此の家長く浪華に富榮えしとぞ。（「雲萍雜志」ニ據ル）

畠のものも、田のものも、林のものも、庭のものも、蟲も、牛馬も、犬猫も、人も、あらゆる生きものは皆雨を待ちこがれた。

「おしめりがなければ、街道はほこりで歩けないやうでございます。」

と、甲州街道から毎日仕事に來るおかみさんが言つた。

「これでおしめりさへあれば、ほんたうに好いお盆ですがね。」

と、うちの女中もこぼしてゐた。

此の二三日非常に蒸す。東の方に雲が立つた日もある。

二三度雷鳴を聞いたこともある。

「今に夕立が來る。」

斯う言つて幾日か過ぎた。

夕飯を早く濟まして庭に出ると、北からひやりと風が來た。目を上げると、果して北に一團の青黑い雲が立つてゐる。其の雲を背にして、こんもりした隣家の杉や樫の木立、孟宗竹の藪などが、濃い綠を浮かしてゐる。

「夕立が來るぞ。」

自分は大聲に呼んで、手早く庭の乾し物・履物などを片付ける。裏庭では、女中が驅けて來て、洗濯物を取入れる。やがて妻や子が庭に下りて來た頃は、北の一隅に見えてゐた青黑い雲が、忽ちの中にむら〳〵と湧起つて、濁つた煙色になり、見る〳〵大空をはひ上り、大軍の散開するやうに、東に、西に、天心に、ずうつと廣がつて來た。

三人は芝生に立つて驚歎の目を見はつて、此のすさまじい雨雲の活動を見た。

青空は今南の一方に押縮められ、煤煙の色をした雲の大軍は、其の青空をすら餘さじものをと、南を指してひた押しに押寄せてゐる。つい今しがたまで雨を戀しがつてゐた大地のあへぎは何處へ行つたか、唯十分か十五分の中に世界は恐しい雨雲の下に閉込められて、冷たい暗いものとなつた。

雲の運動は秒一秒劇しくなつた。南を指して流れる雲、渦巻く雲、じつと止つて動かぬ雲、雲の中から生まれる雲、雲をかすめて移り行く雲、濃くなり、淡くなり、淡くなり、濃くなり、北から東へ、東から西へ、西から南へ、逆流して南から東へ、世界中の煙突といふ煙突から限なく湧く煤煙を此處に集めたやうに、目を驚かす雲の大行軍、音を聞かぬが不思議である。

我等は驚異の目を見はつて、此の活動する雲の下に、魅せられたやうにたゝずんだ。冷たい風がすうつ〳〵と顔に當る。後れ馳せに雷がそろ〳〵鳴り出した。北の方で、赤や紫の電光が時々ぱつ〳〵と半天を照らしてひらめく。近づく雷雨を感じつゝ、我等は猶頭上の雲から目を離し得なかつた。うすぎたない煤煙色をした滿天の雲は、益南へ流れる、水のやうに、霧のやうに、煙のやうに。空は皆動いてゐる。廣い空のどの一寸四方でも、動いてゐないところはない。皆恐しい勢を以て動いてゐる。仰ぎ見る我等は、流れる雲に引きずられて、やゝもすれば驅出しさうになる足を、踏みしめ〳〵立つてゐなければならなかつた。

時々西の方で、或一箇所雲が薄れて、探照燈の光めいた生白い一道の明りが斜に落ちて來て、深い〳〵井戸の底でも照らすやうに、我等と足許の芝生だけを明るく

ヒツメ
ムシテ

する。我等ははつと驚の目を見合はす。と思ふと、もう眞暗になつてゐる。妻や子の顔は土色になつた。草木も人も息を潜めたかのやうに、一切の物音は絶えた。何處から來たか、犬のデカが不安な目つきをして見上げつゝ、大きな體を主人の脚にすりつける。

空はとう〳〵雲に包まれてしまつた。著しく水氣を含んだ北風が、ぱつ〳〵と顔を打つて來た。やがて大粒の雨が來た。雷も頭上近くなつた。雲見の一群は急いで家にはいつた。おも屋の南側の雨戸だけ殘して、悉く戸をしめた。暗いのでランプをつけた。

ざあつと降出した。雷が鳴る。庭中の雨脚をすさまじく

イナビカリ

見せて、ぴかりと電が光る。

見る〳〵庭は川になる。雨が飛石を打つてはねかへる。目に入る限の青葉が一葉々々に雨を浴びて、嬉しさうにぞく〳〵身を震はしてゐる。

「あゝ、好いおしめりだ。」

斯う言つた我等は、更に

「まだ七時前だよ。まあ。」

といふ女中の聲に驚かされた。

夕立から本降になつて、雨は夜すがら降つた。（徳富健次郎「みゝずのたはこと」ニ據ル）

第二十二課　會社

現今何れの國に於ても、多人數が協力し資本を合同して、諸般の事業を經營することが盛に行はれてゐる。此の營業上の組織を會社といふ。

會社の組織には、合名會社・合資會社・株式會社及び株式合資會社の四種がある。

合名會社は、無限責任社員ばかりで組織した會社である。無限責任社員とは、會社が負債を生じた場合、之を辨濟するのに、會社の全財産を提供しても尚之を皆濟することが出來ない時には、連帶して無限に責任を負ひ、各自の財産のあらん限り其の辨濟に當るものをいふ。

合資會社は、無限責任社員と、有限責任社員即ち會社の

債務辨濟に對する責任が自己の出資額だけに止る社員とを以て組織し、無限責任社員だけが業務執行の任に當り、有限責任社員は業務執行の權限のないものである。

以上二種の會社は、普通少數の人々の間にのみ成立するものであつて、親族又は知人同志ばかりで組織するものが多い。

株式會社は、其の總資本を等分して株式とし、出資者は各其の引受ける株式の數に應じて出資するものであつて、多人數の資本を合同し、大規模の事業をするのに適してゐる。株式は略して株ともいふ。一株の金額は普

通五十圓を下ることが出來ないけれども、一時に株金全額を拂ひ込むべき場合に限つて、之を二十圓まで下すことが出來る。株式を引受けて出資したものを、株主といふ。株主は、會社の債務に對して、所有株の金額以上に責任を負ふことはない。會社は株主に對して證書を交付する。其の證書は卽ち株券である。株券は他人に讓り渡すことが出來るから、株式會社の出資者卽ち株主の員數は常に一定しない。

株式會社には取締役と監査役があり、之を總稱して重役といふ。重役は株主の選擧によつて就任するものである。取締役は主として會社の業務を處理し、監査役は

業務の執行に就いて取締役を監督する。株式會社の盛衰は全く其の重役の信用と手腕の如何によるのであるから、重役を選擧するには、公平無私、よく其の人物と能力を考へなければならぬ。重役たるものも亦、一意誠實を以て會社の爲に盡くす覺悟がなければならぬ。

株式合資會社は、無限責任社員と株主から成り、會社の業務は無限責任社員が擔當する。卽ち合資會社と株式會社との性質を合はせたやうなものである。

第二十三課　逗子だより

何時の間にやら秋風身にしむ頃と相成候憂なき此の心は物の悲しきを覺えずおもしろ

く嬉しく樂しく暮し居り候

去る八月二十六日は舊暦の七月十六日に當り候へば晩餐の箸を投じ浴衣がけに麥藁帽を戴き逗子の濱邊を過ぎて友人の寓をおとづれ候さて相携へて三崎街道に沿ひ鐙摺山に到り候鐙摺山とは賴朝が三浦出陣の時此處にて鐙を摺りし故に斯く名づけたりと口碑に存し居り候和田義盛が畠山重忠と合戰の時此處に陣を取りし由源平盛衰記に見え候文明の恩澤は此の山の絶壁を切下げ海に沿うて馬車をも馳せ得べき大道を開き候山は小高くして海上に突出し逗子灣を隔てて小坪岬と相對し恰當の觀月臺に候やがて月鐙摺山の背より出づれば海上蒼茫としてただ此處彼處に月影の反射を見るのみ當面の富岳は夢の如く淡く雪舟のゑがきし淡墨畫に似たり不思議なるかな豫て見覺なき奇峯突兀として富岳の周圍に立並ぶこは妙義山の飛來したるかさてもおもしろきことよよく見れば雲にてありしもをかしく候

我々兩人は興に乘じ談笑の中に村社の祭禮の雜沓せる中を過ぎて早くも森戸川の橋上

に到り候月光はくまなく相模洋より伊豆の島々を照らし候海上に天あり天上に海ありに湧來る高潮は寄せて卷きて碎けて散りて黄金の波となり白金の波となり眞珠の波となり錦繡の波となり雄大なる音樂を奏し候」森戸川を渡りて右に折れ亂松の間を蛇行すればやがて森戸神社に候松林帶の如く海上に連なり林盡きて巖そびゆる處祠堂あり幾多の奇岩を隔てて名島と相對し候先づ此の邊の絶景の一にて候

何時しか突渡崎にさしかゝり候がこれよりは井上梧陰君の別莊も程近し序なれば門をたゝくも一興ならんとて近路を取りて濱邊に下り行き候月は益さえ來り潮は愈高くなり殊に此の邊は奇岩怪石亂立したれば濤聲すさまじきばかりに候ふと見れば彼方の岩上に大いなる鷺の如きものたゝずみ居り候近づけば人なり更に近づけば思ひきや梧陰君ならんとは

斯くて君に導かれて濱邊の裏門より入り椅子を庭上に移して松間の月影を眺めつゝ漫

談に打興じ覺えず時刻を移し候中あやにくや怪雲月をかすめ來り候いざさらばと辭して濱邊に出づれば黑紗の如き雲の絶間より月は再び現れ候

友と共に歩して歸路につけばさしも賑はしかりし村社の祭禮も神燈の光ほの暗くうたた寂寥を添へ申候友は夢漸く濃やかなる渡守を呼起して宿に歸り小生は其のまゝ相別れて寓居へと急ぎ申候

三五の村舍今は死よりも靜かに眠り候冷やかなる風はそよ〳〵と御最後川のみぎはなる蘆洲を吹渡りて鬢となく額となく頰となくなめ候雲間の月は青白く六代御前の森の上に懸り候御最後川の橋上より眺むれば微かなる火光一つ二つこれ漁燈かこれ鬼火か宿に歸りて戸をたゝく折しも雨點兩三はらはらと帽上に落ち候草々（德富猪一郎「蘇峯文選」ニ據ル）

第二十四課　地震

地震の起るのは種々の原因によるが、一口にいへば、地殼を構成する物質が、久しい間蓄積せられた壓力に堪へきれなくなつて、急激な變動を起すに基づく。此の變動が波動となつて四方に廣がる現象を、地震といふ。

ヤボ
キカイ
テキイ
バクハツ

地震中大規模のものには、いはゆる斷層地震が多い。これは變動と共に、新に斷層を伴なひ、或は既成の斷層に移動を起すものである。さうして是等の變化は、實際に地表面にまで及ぶことも少くない。明治二十四年の濃尾地震、同三十九年のアメリカ合衆國サンフランシスコ地震等は此の種の適例である。

火山が爆發する時も、其の勢力の一部分を以て四圍の地に激動を與へ、地震を起すが、其の震動は極めて小さい。之に反して、爆發に伴なふ空氣の波動は、四百キロメートル餘の遠距離までも達して、家屋を振動せしめることがある。明治四十二年に於ける淺間山の爆發など

メンガイ
テンカキ
ユライン

はこれである。又火山の破裂に前後して、多くの地震を起すことがある。これは大地震ではないが、それでも粗造の構造物は、時として多少の損害を被ることがないではない。明治四十三年の有珠山噴火に先だつて起つた地震や、大正三年の櫻島噴火後の地震などはこれである。

或地方で地震が起らうとする前には、其の附近の地殼は既に極めて不安定の狀態にあるのであるから、地表面上に影響する外力の變化に伴なつて、活動を始めることが往々ある。外力とは、大氣の壓力、雨雪・潮汐等のことであつて、是等の變化は、地震の誘因ともいふべきも

のである。

地震は地下に存する弱點を除去するものであるから、一度大地震の起つた後には、引續いて同一中心地から、更に大破壞的地震の起ることはないわけである。又餘震は時としておびたゞしい數に達することがあるけれども、其の破壞力は、普通最初の地震の十分の一以下のものである。且此の餘震があるために、地殼は再びもとの安定の狀況に復することが出來るのであるから、却つて喜ぶべき現象といはねばならぬ。

地震動の强弱は、地震の大小と震原の遠近によつて違ふけれども、其の土地の地質狀態及び地形に關するこ

とも少くない。例へば斷崖・河岸等では、常に其の震動が他よりも大きい。又岩石や赤土の固い地盤では震動は弱いが、泥又は砂地であつたり、埋立地のやうに土質の柔い場所であると、震動が非常に强く、時によると、水や泥砂を噴出したり、地割れを生じたりすることがある。」

地震の震動は、普通斜に往復運動をするものである。故に地上の物體は、上下にも水平にも動くことになる。但し震原に近い處では上下動が著しく、震原から遠ざかるに隨つて水平動が主となり、上下動は減じて行く。被害の程度は勿論震原に近い程甚だしい。

我が國には古來地震が極めて多く、大地震も少くない

が、家屋は大抵輕い木造であるから、死傷者は割合に少い。去る大正十二年の關東大地震は、東京市内の死亡者だけでも約六萬、實に空前の大慘事といはれてゐるが、それでも直接地震のために壓死したのは、僅かに其の百分の一强で、大部分は地震によつて起つた火災のために死んだのである。

斯ういふ風に、我が國の家屋は地震に對して比較的危險が少いから、地震の際にも決して狼狽してはならぬ。勿論容易に屋外の安全地に逃げることの出來る場合には、早く戸外に出る方がよいが、若し途中危險な處を通らねばならぬとか、逃出しても避難すべき場所の無

い場合には、寧ろ屋内に止つて、丈夫な机や寢臺の下などに身をよせてゐる方がよい。殊に木造の二階建では、たとひ階下がつぶれても二階はつぶれない場合が多いから、二階に居て地震に會つても、あわてて飛下りるやうなことをしてはならぬ。又一旦屋外に出たならば、屋根から落ちる瓦や、石垣・煉瓦塀などの崩れるために負傷しないやうに注意し、避難地が海岸や谷間であつたら、津浪や崖崩等についても用心しなければならぬ。

以上は火災の恐のない場合であるが、若し火を使用してゐた際ならば、何よりも先づ火の元に注意して、火事の起らぬ用心をすることが肝要である。木造家屋の多

い我が國では、此の注意を怠ると、思ひがけない大慘害を招いて、經濟的にも精神的にも償ひ難い損害を被ることになる。

第二十五課　日本の風土

試みに大日本全圖に向つて、帝國領土の廣がりを見よ。樺太・千島・北海道・本州・四國・九州・琉球・臺灣の島々は、東北より斜に長く西南に連なり、最南の臺灣の一部は既に熱帶の内にはいつてゐる。又朝鮮は滿洲及びシベリヤに接して、アジヤ大陸の一部分である。されば地方によつて氣候に甚だしい差異があり、生物の種類も頗る多い。

寒地から熱地へ、熱地から寒地へ渡る禽鳥で、我が帝國の領土を過ぎて翼を休めるものは少くない。鶴の群はシベリヤ方面から飛んで來て、ほがらかな聲を朝鮮の空に響かし、鷺は熱帶地方から飛んで來て、一望十里の青田に下立つ。獸には象や犀・獅子などこそ居ないが、野獸に家畜に其の種類はかなり多い。植物も亦豐富で、春は櫻、秋は花よりも美しい紅葉が、松・杉・檜などの常磐木の間を點綴してゐる景色は、獨り我が國に於てのみ見られるのである。

本州全體は溫帶の中部にあり、氣候は概ね溫和で、土地も豐饒で、水蒸氣も多量であるから、到る處植物がよく

繁茂する。冬季には北西の風が多く、夏季には南東の風が多い。春季から夏季に移り變りの際には、氣壓配置の變化に伴なつて、陰雨連日にわたり、いはゆる梅雨をなす。我が國の米産國であるのは、實に此の梅雨に負ふ所が多い。又冬季には、アジヤ大陸から吹いて來る北西風が、日本海上の水蒸氣を運び來つて、本州の中央に連なる山脈に吹着ける。それがため凍雲日光をさへぎり、降積る雪は北陸・山陰の地を銀世界にする。由來太平洋岸と日本海岸は種々の點に於て相反するが如く、晴曇に於ても全く趣を異にする。冬季、上・信・越の境にそびえる三國峠に立つて北方を望めば、密雲層々空を覆ふに、南

方を顧みれば、一天片雲なく、まばゆき日の光が山岳・原野を照らして、數十里の風光が一望に入るのに驚くのである。

火山脈は本州を縱斷横斷してをつて、昔から三國一の名山と稱へた富士山を始め、磐梯山・赤城山・榛名山・淺間山・立山・白山等の山々、現に噴火してゐるものもあり、今は噴火してゐないものもあるが、其の變化に富んだ山容は、風景の美を添へることが多い。然も外國の火山の如きはげ山は少く、何れも綠樹鬱蒼として、其の中腹又は麓には火山湖や溫泉が多い。斯くの如き山脈によつて分たれた地勢は、もとより茫々たる大平野をなす餘

裕が無い。隨つて川には長流が少く、急流奔馬の如く、直ちに走つて海に入るものが多い。

第二十六課　ビクトリヤ女帝

イギリスの女帝ビクトリヤの生まれしは西暦一千八百十九年にして、汽船の始めて大西洋を横ぎりし年なり。一千八百三十七年、十九にして皇位に登り、一千九百一年、八十三の高齢にて歿するまで、其の治世六十五年間は、イギリスの國運旭日昇天の勢を以て發展

し、遂に前古未曾有の隆昌を極めたる時代なりき。

ワーテルローの戰爭に於てナポレオンの一敗地に塗れしは、女帝誕生の年に先だつ四年なり。イギリスは國民の冒險と勇敢と勤勉と忍耐とを以て、數百年の間に廣大なる領地を拓きたりしが、今や此の戰により、一躍してヨーロッパの最强國となれり。ビクトリヤ女帝は、生まれながらにして此の强國を統治するの幸運を得たり。又第十八世紀の終より第十九世紀にわたりては、蒸氣・電氣を利用したる大機械の發明頻々として現れ、商工業の狀態全く一變せしが、是等の機械を最も多く發明利用したるはイギリス人にして、イギリスは女帝の

治世に於て、世界商工業の覇權を握るに至りしなり。凡そ時代の形勢を察し、之を善用利導するは、君主たるものの任務なり。女帝ビクトリヤの此の大任に當るや、よく賢相の言を容れ、施政宜しきを得て、あつぱれ明君の譽を四海に專らにせしは、誠に其の英明なる天資と、國利民福を思ふの至誠とに依らずんばあらず。女帝は常に其の天與の大任を重んじ、寸時も國政を忘れず、大小の政務一々其の利害得失を究むるに非ざれば、裁可を與ふることなかりき。彼の外交事件の最も紛雜を極めたりし一千八百四十八年の如きは、二萬八千通の外交文書を一々閲覽したりといふ。

一千八百四十年、齡二十二にして、ドイツよりアルバート公を迎へて皇婿となし、四人の皇子と五人の皇女とを擧ぐ。第一は皇女にしてドイツ帝フリードリヒ三世の皇后。第二は皇子にしてイギリスの皇位を嗣ぐ。エドワード七世是なり。其の他の皇子・皇女、何れも王公の家を保ち、皇室の繁榮、國家の隆盛と相伴なへるは、誠に多幸多福なる生涯といふべし。

女帝は、溫容玉の如き中に侵すべからざる威嚴を具へ、貞淑にして慈愛の心厚く、常識に富みて能く下情に通じ、文學・音樂の造詣も淺からず。又數箇國の國語に熟達し、印度語をさへ學べりといふ。

二十七
ラッパ
ツメ
ハイ
サイキン
フチヤウ
ミツペイ
セツシヨウ
シメツ

第二十七課　罐詰

食物の腐敗を防いで長く貯へておくにはいろ〳〵の方法があるが、最も完全なのは罐詰にすることである。物の腐敗するのは細菌の作用によるのであるから、細菌が附着しないやうにすれば、腐敗は防げるわけである。罐詰は實に此の理によつて作つたもので、罐の密閉によつて外界との接觸を斷ち、熱を加へて罐内の細菌を死滅せしめるのである。斯うすれば「蒔かぬ種は生えぬ」理によつて、罐内に細菌が發生することはないから、内容物は腐敗する憂がない。

罐詰には、魚肉や獸肉のもあれば、野菜や果物のもある。

サケ
カニ
ギヨウ
ラリアゲ
ランポン
セレ

其のまゝ食用になるやうに調味したものもあれば、調理の原料とするために水煮にしたものもある。罐詰の種類によりそれ〴〵其の製造法に多少の差異はあるが、大體の工程は皆同樣である。中でも鮭や蟹は、一時に多量の漁獲があり、又之を手早く處理しなければならぬ必要があるので、是等の罐詰工場は、規模が頗る大きく、又設備もよく整つてゐる。今鮭の罐詰製造の有樣を述べてみよう。

陸揚された無數の鮭は、自動運搬機でどし〳〵と工場に運ばれ、先づ第一に調理機にかゝる。此處で頭・尾・鰭は切取られ、内臓は取除かれ、更に冷水できれいに洗はれ

る。これだけの作業は一臺の機械で行はれ、然も一分間に優に六十尾の鮭を處理する。第二の機械は魚肉切斷機である。此處で罐の大きさに切斷された鮭の肉は、次の肉詰機に移され、少量の鹽を加へて罐に詰められる。次は此の罐に蓋をするのであるが、最初から蓋を固く締めてしまふと、後に蒸釜に入れて加熱殺菌する際に、罐内の空氣が膨脹して罐をいためる恐があるから、先づ假締機にかけ、蓋を緩く締めて、次の脱氣函に送る。脱氣函の内部は常に百度ぐらゐの溫度が保たれてをるから、假締のまゝ此の中に十五六分も入れておくと、罐内の空氣は膨脹して、大部分蓋の隙間から脱出する。そ

こで之を本締機にかけ、蓋を締めつけ、密閉してしまふ。密閉した罐詰は、次の蒸釜に入れ、熱を十分に加へて殺菌する。こゝで肉も完全に煮沸されるのである。

此の外に、物によつては、初から本締にして蒸釜に入れ、罐に穴をあけて空氣を拔き、後から其の穴をふさぐ方法もあるが、それは空氣と共に肉汁等が流出することなどもあつて、完全な方法とはいへない。

完全に製造された罐詰は、かなり長い貯藏に堪へるものである。かつてイギリスの北極探檢隊が極地に於て拾ひ取つて來た罐詰を、博物館に陳列しておいたが、七八十年たつて、試みに蓋を開いてみたら、少しも腐敗し

てゐなかつた、又難破船から漂着した罐詰を、其の後五十年もたつて明けてみたら、なほ十分食用に堪へたなど、いろ〳〵のおもしろい話が傳へられてゐる。しかし罐詰にも時々不良の品があるから、よく注意しなければならぬ。罐をたゝくとかち〳〵と固い音を發するのは良い罐詰であるが、之に反して、ぼこ〳〵と空虛な音を發するものや、蓋や底がふくれ上つてゐるのは、不良な品である。これは殺菌が不十分であつたり、又は罐に疵があつて、其處から細菌が侵入したりして、中身が腐敗し、瓦斯を發生したものである。次に、罐詰は蓋をあけたならば、直ちに之を他の容器に移し、なるべく早く食べてしまふがよい。

第二十八課　落日

一

野は里は　たそがれ初めて、
連なれる　山のいたゞき、
かゞやかに　光にほへり。

二

あや雲の　波漂ひて、
大いなる　くれなゐ色の
燃ゆる日は　今し落行く。

三

言葉なく　眺めてあれば、
我が胸の　奥にぞ通る、
落つる日の　尊き光。

第二十九課　待賢門の戰

左衞門佐重盛、討手の大將を承つて言ふやう、「年號は平治なり、都は平安なり、我等は平氏なり。三事相應ぜり。敵を平げんこと何の疑かあるべき。」と、三千餘騎を三手に分け、陽明・待賢・郁芳の三門に押寄せたり。源氏方には、三門をさし堅めて、大庭に馬ども多く引立て、用意をさを　さ怠なし。

重盛は、手兵五百餘騎を率ゐて、信頼が守れる待賢門に

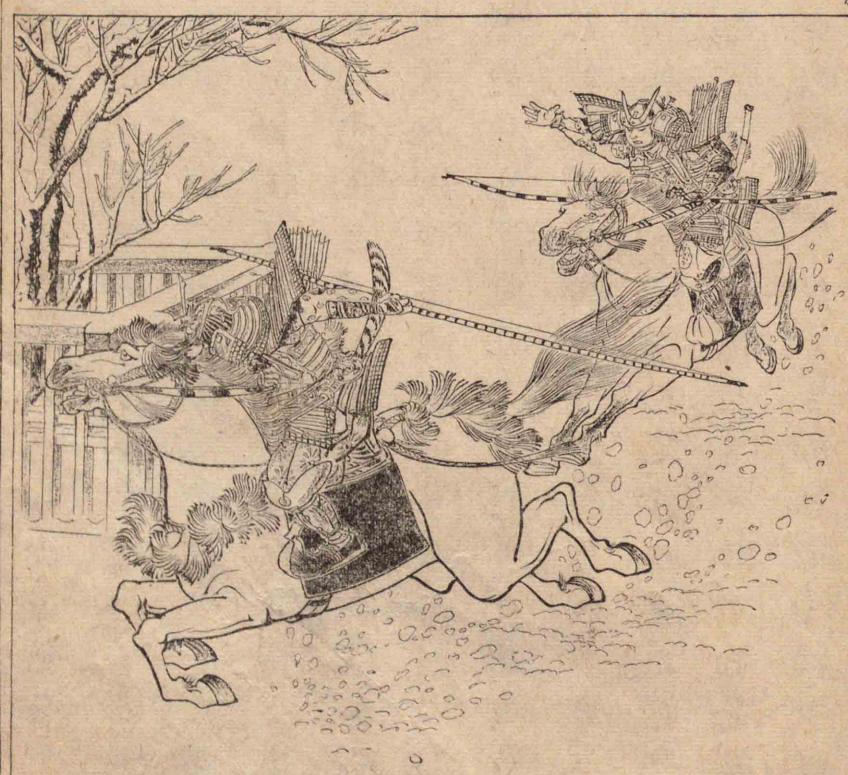
向ひ、大音聲に呼ばはりけるは、「此の門の大將軍を、信頼卿と見るはひが目か。斯く申すは、桓武天皇の後裔、太宰大貳清盛が嫡子、左衞門佐重盛。生年二十三。」と名乘りかくるに、臆病なる信頼、返事にも及ばず、「それ防げ、侍ども。」とて引退く。大將退却すれば、防ぐ侍一人もなし。我先にと逃げければ、重盛愈勇みて、大庭のむくの木の下まで攻めつけたり。義朝之を見て、「惡源太は無きか。信頼といふ大臆病人が、待賢門を早破られつるぞや。あれ追出せ。」と呼ばはりければ、惡源太義平、「承り候ふ。」とて驅出でたり。續く兵には、鎌田兵衞・後藤兵衞・佐佐木源三・波多野次郎・三浦荒次郎・須藤刑部・齋藤別當・岡部六彌太・猪俣小平

六、熊谷次郎・平山武者所・金子十郎・足立右馬允・上總介八郎・關次郎・片桐小八郎大夫、以上十七騎、くつばみを並べて馳向ふ。

惡源太義平、大音聲を上げて、「此の手の大將は誰人ぞ。名乘れ、聞かん。斯く申すは、清和天皇九代の後裔、左馬頭義朝の嫡子、鎌倉の惡源太義平。生年十五歲の初陣より、度度の合戰に一度も不覺の名を取らず、年積りて十九歲。見參せん。」とて、五百騎の眞中へ割つて入り、西より東へ追ひまくり、北より南へ追廻し、縱樣橫樣十文字に敵をさつとけちらして、「端武者どもには目なかけそ。大將軍を組んで討て。」といふく、大庭のむくの木を中に立て、

左近の櫻、右近の橘のあたりを七八度追廻して、組まん組まんとぞもみたりける。十七騎に驅立てられて、平家の五百騎、かなはじと引退く。

重盛弓杖ついて馬の息をつがする所に、筑後守家貞つと



参りて、「あつぱれ、平將軍の再來かな。」といふを聞きて、今一度驅けて家貞に見せんとや思ひけん、更に新手の五百騎を引具して、またむくの木の下まで攻寄せたり。惡源太驅向ひ、「兵は皆新手なれども、大將は元の重盛なり。此の度こそは討ちもらすな。」と下知すれば、勇みに勇みたる十七騎、我先にと進み出づ。惡源太弓をば小脇にかいはさみ、鐙踏張り突立上り、「我も源氏の嫡男なり。御邊も平氏の嫡男なり。よき敵ぞ。寄れや、組まん。」といふまゝに、さきの如くむくの木の下を追廻して、五六度までもみたりけり。重盛またもかなはじと、門を出でて引退く。惡源太二度までも敵を追ひまくり、暫し馬に息つが

するを、義朝遙かに見て、「汝が不覺に防げばこそ、敵度々馳入るなれ。あれ追出せ。」と言ひやれば、義平聞きもあへず、「承り候ふ。進めや、者ども。」と、十七騎共に討つて出で、敵五百騎が中へ面もふらず割つて入る。浮足立つたる平家勢、馬の足を立てかねて、逃行く樣ぞ見苦しき。義朝之を見て、「我が子ながらも、義平はよく驅けたるものかな。あ、驅けたり。」とぞほめたりける。（「平治物語」ニ據ル）

第三十課　興國の民

元氣旺盛にして進取の氣象に富み、目的の存する所、必ず實行の計畫あり。

思慮周密にして決斷力に富み、計畫一度定まれば、直ち

に之に着手し、勇往邁進、成功を見ざれば止まず。活動を以て無上の樂しみとし、安逸を以て最大の苦痛とす。獨り自ら活動するのみならず、又能く人を活動せしむ。

自信の念篤く、自立自營、他を羨まず、他に依賴せず。前途に希望を有して、人生を悲觀せず。不幸に遭遇するも落膽することなく、必ず新進路を求めて、運命の轉廻を圖る。

遠大の志望を抱きて、能く艱苦と戰ひ、終局の勝利を期待して、自彊息むことなし。

虛名を卑しみ、實功を貴びて、華を去り、實に就く。

義務の觀念強く、職責を重んじて、忠實業に服す。

己を持すること謹嚴、公德を重んじ、規律を尊び、高雅善美なる嗜好を有す。

氣宇闊大にして、人を容るゝの量あり。能く他國民と親和し、又能く之を同化す。

公平無私、能く事物の長短を識別し、我が短を捨つるに吝ならず、他の長を採るに敏なり。

協同一致の精神に富み、團結の力強く、公益の爲には私情を去り、私利をなげうつ。

行住坐臥、國家を思ひ、事を處する、必ず至誠奉公の精神に基づく。

高等小學讀本 卷三 終

昭和十一年九月五日修正印刷
昭和十一年九月八日修正發行
昭和十一年九月八日翻刻印刷
昭和十一年十二月九日翻刻發行

高等小學讀本卷三
定價金拾壹錢と

昭和十一年九月九日
文部省檢査濟

著作權所有

著作兼發行者　文部省

翻刻發行兼印刷者　東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地
東京書籍株式會社
代表者　石川正作

印刷所　東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地
東京書籍株式會社工場

發行所　東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地
東京書籍株式會社

庫
36
782
広島大学図書
2500029782